
ねえ、すきだよ。

快丈風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねえ、すきだよ。

【Nコード】

N1011A

【作者名】

快丈風

【あらすじ】

初恋をした私に“カワイイ”って言ってくれたキミ…。高校2年の有沢優梨は前野良平に恋をした。果たして、この恋は実るのだろうか…

キミとのであい。

好き・すき・スキ…何度この言葉を繰り返したかな…。

初めてキミに会ったのは…天気予報が大外れした、どしゃぶりの日だったよね。

「おい、有沢！有沢優梨！！」

そうやって、生徒玄関前で雨宿りする私に声を掛けてくれたっけ…。

「何？今日遅いね。委員会？そろそろ文化祭だし、有沢って文化祭の実行委員だろ。大変だな」　それまで私の中では、キミなんてただのクラスメイトだった…

「うん…まあね…でも、嫌いじゃないよ。こういうの。…前野君は？委員だったけ？」

「いや、俺は裏方とか仕切るのとか向いて無いからさ、どっちかというとお膳立てしてくれたのに乗っかるタイプなんだよね。」

明るく笑い飛ばすキミ。

キミと話したのはあの日が初めて…でも、キミの尽きない話しは、私にキミの魅力を気付かせるかの様に鮮やかだった。

「…前野君は？部活？」

「そ。部活。バスケ部。今日はレギュラーテストでさ、遅くなったんだよ。」

「へえ、スポーツ部なんだあ…すごいね。私って運動音痴だからスポーツやってる人って尊敬する。」

「尊敬なんて大袈裟だよ。それに、俺はお前の尊敬に値する様な奴じゃないと思うけど…」

「どうして？レギュラーテスト、受けたんでしょ？そのやる気に尊敬だよ。」

「やる気に尊敬？お前、面白い奴だな。」

「そうかな…ふふふ。」

「有沢がそんな風に笑うの初めて見た…笑うと結構カワイイじゃん。クラスでもさ、そうしてなよ。絶対モテる。」

「前野君、変な事言わないでよ。私、カワイくなんかないし…」

「そんな事無いと思うけどなあ…あ、ところで、なんで有沢はここにいの？」

「私？…天気予報外れちゃってさ、傘忘れて雨宿り。…でも止みそうにないよね…」

ちよつとの沈黙。そしてキミが口を開いた。

「コレ、貸す。」

「えっ…？」

「有沢って北町だろ？学校と反対側じゃん。俺んちこの辺だし。」

「でも、悪いよ…それに、結構降ってる…風邪引いちゃうよ。」

「部活で鍛えてるから大丈夫だよ。それに、レギュラーテスト終わったし、別に風邪引いても問題ないし。」

まだ少し迷っている私の手に傘を押しつけて、キミは駆け出したよね。

「じゃあな！気をつけて帰れよ！！」

あまりにも突然の出来事に、私は呆然としながらこう言った。

「バイバイ、また明日、前野君！！」

最後まで言い終わらないうちにキミは見えなくなったよね。

手の中の傘を見た。100円の透明なビニール傘。キミとの会話が鮮明に残ってる。

『笑うと、結構カワイイじゃん。』

「…結構カワイイか…カワイイのかな…私って…」
そう言いながら傘を広げた。

くつついてたビニール同士がパリパリと剥れていく。

「コレ、使った後干して無いな…」

ブツブツ独り言を言いつつ傘をさして歩きだす。

ふと上を見上げた。

私は笑ってしまった。

「ふふふ。何この傘、穴あいてんじゃない。」

“笑うとカワイイ”…のかは別として、私は傘の穴を見て笑って

いた。

そして、そのままの顔で家に帰った。

前野良平 忘れられないキミの名前。
ったかくなるキミの名前…。

そして、聞いたら心があ

キミがすきつてきがついた

次の日の朝、私はキミに傘を返した。

「昨日はありがとう。助かった。」

「わざわざありがと。傘、大丈夫だった？」

「それがねえ……」

くすくす笑う私を見てキョトンとするキミ。

「何？なんかおかしかった？」

「あの傘、穴開いてた。」

くすくす笑いを堪えてやっと言えた言葉。

「えっ……まじで？気付かなかった……悪かったなあ……」

「うっん。別に大丈夫だったんだけど、なんか面白かったの。」

「何が？穴開いてた事？」

「まあね。でも、それだけじゃなくて前野君の事、昨日初めて知れて……良かったなって。」

「俺も。有沢の事ちゃんと知ったのって昨日。ま、お互い良かったじゃん。俺の事さ、良平でいいよ。」

「私も優梨で。レギュラー、いつ発表？」

「今日の部活。受かってるかな…昨日もあんまり寝れなくてさ…」

「頑張ったんだから大丈夫！私も応援してる。」

「そうか？んじゃあ結果が分かったら、優梨に一番最初に話す。」

「うん。楽しみにしてる！」

「おう！それじゃ、俺、ちょっと職員室行かなきゃ…じゃあな！」

「うん。またね。」

“またね”：今まで男の子に言った事なんてなかった。初めての相手がキミだった。

「何？優梨、前野と仲良いじゃん。どしたの？」

「亜花莉…実は良平君に昨日傘借りてさ、さっき返してたの。」

「ふう〜ん…ホントにそれだけ？」

「それだけだよ。別にそれ以外何も無かったし。」

「ま、私には彼氏いるからさ、どーでも良いけど、前野の事狙ってる女子、意外と多いから、頑張つてね。」

「だからあー、違うつて言ってるじゃん！」

口ではそう言いながらも、心の中ではちよつと落ち込んだ。

昨日、家に帰ってから、ずっと眺めてたキミの傘。

よく分からないけど、キミの言葉が木霊する。

『笑うとカワイイ』

…キミの目に映った私はカワイイ女の子だった？

…キミの前で私は、笑顔だった？

そんな自問自答ばかり繰り返してた。

心の中に、キミが居る。

キミが眠れない夜…私も眠れなかったよ。理由は違ったけど。

自分の好きな歌手のラブソングを聞いた。

今までは他人事みたいだった歌詞が、自分の事を歌っているのか？

…と思う程共感した。

すきだよ。キミが。

初めてだよ。

こんな気持ち。心が君の言葉と笑顔で染まっていくのが分かる。

恋って、思い続けて実るものだって思ってた。

でも、私は違った。これを世間一般では、‘一目惚れ’ってい

うんだよ…

キミは私にどういってもりで“カワイイ”って言ったか分からないけれど、君の笑顔と言葉が、私の心でとろけあう。

前野良平 私が初めてスキだって思った人の名前。初恋の言葉。

一目惚れの相手。

キミのなみだ

学校の帰り道、やっぱり考えていた事はキミの事だった。

（レギュラー大丈夫だったかな…良平君、もう帰ったかな…）

結局、実行委員会の仕事もロクにこなせず、先輩に怒られてばかりだった。

今日はあまりにも気持ちが落ち着かない。キミの心配事は、私の心配事になった。

こうやって気持ちが落ち着かない時や、気分を変えたい時は、いつもと違う道を通って帰る。今日は裏口から帰る。

校舎裏にある裏口。

普段は全く人がいない。だから私のお気に入りの散歩コース。

大きな紅葉の木。

真っ赤な落ち葉。

桜みたいに可憐な散り方はしないけど、私は紅葉の方が好きだった。

「小さい秋、小さい秋、小さい秋、みいゝつけた。」
つい童謡を口づさむ。これも楽しい。

「目えゝ隠し鬼さん手ゝの鳴る方へ…」

…その続きは歌えなかった。

キミがいた。

キミと目が合った。

「優梨？今歌ってた奴って、優梨か？」

キミは目を丸くして私に聞いたっけ。私はとにかく恥ずかしくて何も言えなかった。

「すげえな。俺さ、すんげえ音痴だから、歌とか歌えねえよ。」

「わっ…私も音痴だけど…誰もいないと思ったから…」

キミのせいだよ。キミのせいで顔が紅葉みたいになってゆく。

「あ、そんな事より、良平君、テストはどうだったの？発表、あったんでしょ？」

その瞬間、聞かなくや良かったって思った。

だって、キミは分かりやすいぐらいに顔を曇らせたんだもん。

「…落ちた。」

沈黙。落ち込んだキミに、私はなんて声をかけたら良いの？

「そつか…残念だったね…」

また沈黙。

私は顔をあげられなかった。目が合うと、その悲しそうな目を見ると、絶対泣くから。

「でもさ、一応準レギュラーにはなれたんだ。だから、頑張ればまだチャンスはあるよ。」

「うん…そうだね！私、応援してる！だからさ、準なんて早く卒業しちゃって、レギュラーになる！」

「おう！」

そう言いつつも、キミの目は笑ってない。

すると、キミのまあるい目から、涙の粒が落ちた。

「あ、なんだよ。俺、カツコ悪っ！泣いてやんの。」

キミの涙は止まらない。

「俺さ、今まで…っていつても、幼稚園から先は、泣いた事、無か

「つたんだぜ。」

切れ切れの言葉。私の心はもう号泣。キミの涙が私の心に流れたのかな…

「あゝ、ちくしょう、止まんねえ。涙って、こんなに止まんなかったっけ。」

キミの涙は、まだ止まらない。

「俺さ、弱くなっただよな…昔はこんなじゃなかった…」
私の口は、勝手に開いてた。そして無意識に言っただ。

「いいじゃん、泣いたって、カッコ悪くなんてないよ。」
キミは、驚いた様にこっちを見る。

「もし良かったらさ、泣いちゃいなよ。」

「すっきりするよ。」

キミの瞳に溜まってゆく涙。

「泣く事を我慢しないで。大丈夫。私、笑わないし、見ない。」
そう言った瞬間、キミの目から大粒の涙。
キミは大きな声で泣いた。

「…おさまった？」

「…ああ。」

やっとキミが泣き止んだ。

長かったような…短かったような…不思議な感覚。

私はキミの側を離れられなかった。キミを直視出来ないけど、側にいたいと思った。
落ち葉の上で、座り込む私たち。

「ありがとう。」

「え？」

「泣いたところ見られたのが優梨で良かった。」

「ホントにレギュラー、なりたかったんだね。だからあんなに泣いたんだね。」

またちよつと沈黙

「泣きなよ、良平君。私の前で良かったら。」

「ばか。男がそんなに簡単に泣けるか。」

「良いじゃん。でも、楽になったでしょ？」

「まあな。」

そう言って立ち上がるキミ。私の前に手をさしだす。

「送ってく。」

「えっ？」

「もう、暗くなってきたし、明日は休みだし、部活ないし…送ってく。」

「そんな、大丈夫だよ！一人で帰れる。」

「お前が良くても、俺が心配なんだよ。ほら。」

そう言つて、さらに手をさしだすキミ。

キミの手に触れる。ひんやりとどこか冷たい。

お互い、黙つたまま歩いた。話かける言葉が見当たらない。
家の前に着いた。

「そんじゃ、ここで…良平君、大丈夫？」

「おう！大丈夫だよ！！」

キミの笑顔。良かった。笑顔が戻った。

「俺さ、あんな風に人に弱み見せたのつて、優梨が初めてだよ。」

「そうなんだ。…なんか光栄。」

「おう！永久保存版だぜ。」

お互い笑った。そして、キミは帰れる。

「それじゃあな、優梨！また学校で！」

「うん。また学校でね！」

キミの笑顔がまだ残つてゐる。なんで？

キミの泣き顔がまだ残つてゐる。どうして？

キミの笑顔も泣き顔も、全部大好き。

私の前では弱みを見せてつて言つたの、嘘じゃないよ。
いろんなキミが見たいの。もっと見せて。

前野良平 笑顔に溢れた。泣き顔が浮かぶ名前。大切なキミの名
前。

キミからのこくはく

キミの涙は七色だった。光る、綺麗な粒だった…

キミの涙を見たあの日から1週間たった。

あれからの私たちに変化はない。

ただ、キミが泣いた次の週、キミの目は少し腫れてたけど…

「…さんっ…有沢さんっ!!」

「…っ、はい!」

「どうしたの?最近、ボーっとしてばかりで…」

「…すいません…」

「疲れてると思うけど、文化祭は明日よ。もう少し頑張りましょ
うね。」

「はい…すいませんでした、佐藤先輩…」

私は文化祭の実行委員。

別に好きでなった訳じゃないけど学校全体を運営する…という事に
魅力を感じていた。

なのに…キミに出会ってから…キミの事ばかり…

「あ、そうそう、有沢さん、あなたのクラス、出し物…劇だったわよね？」

「…えっ、はい…」

劇は、私たちのクラスのオリジナル劇。
学校の生徒や先生がタイムスリップする…というものだ。

「有沢さんは劇に出るの？」

「いえ…裏方です…」

確か、キミも裏方だったよね。

「何係？」

「衣装です…」

キミは舞台装置係…主人公がとても似合いそうだけど、余った役がそれだけだったから…キミは裏方になったね。

「それが…何か？」

「それがね、受付係が足りないの。2年の出し物の時だけ、他の委員がみんな出払ってるのよ。…それで、あなたしか空いてる人いないのよ…だから…」

「はい、いいですよ。やります。」

「そう、良かった！とっても助かるわ。ごめんなさいね…あなたも見たいかもしれないけど、2年生全員の…1時間だけでいいから。」

「いえ、構いません。衣装係だから当日は

特に役もないんで…」

「そう言ってくれるとありがたいわ。それじゃ、明日、よろしくね。仕事の内容は明日言うから。」

帰り道、なんか今日も裏口から帰りたかった。

ホントは劇見たかった。

亜花莉がヒロイン役だし、実行委員会とかでロクに劇も見えてなかった。

何で見たかったって言わなかったんだろ。

相手が先輩だったから？

人手が足りないから？

…違う。私は自分の意見が言えないんだ。

ふと上を見る。休みの間に結構散った紅葉。足元にはたくさんの枯れ葉。

その中の1枚を拾う。真っ赤な紅葉。綺麗：

そうつとポツケにしまう。

キミに会いたい。

キミと話がしたい。キミに思いが伝わらなくても、ずっと一緒に

に居たいって思う…

「おーい、優梨！」

キミの声？

振り返る。

…キミだ。

さっきから、ずっと見たいと思ってたキミの笑顔。

「優梨！やっぱりこっちから帰ってた！」

「…やっぱり？」

「お前がさ、今日はこっち通るかなって思ったんだよ。だから、そ

の辺で待つてた。」

キミが指差したのは、この前キミと私が座つてた辺り。

「ごめん…考え事してて気がつかなかった…」

「いいよ。実行委員会だったんだろ。明日だもんな。」

「ねえ、クラスの出し物つて、どれくらい進んでる？明日大丈夫？」

「えっ…？先週は俺もレギュラーテストとかで出らんかったけど、今日みた限りだと、大丈夫そうだよ。」

「そっかぁ…良かった。」

「優梨、自分がクラスのに出らんないから気にしてんのか？大丈夫順調。北里も上手いし。」

北里は、亜花莉の名字。

「うん、良かった。気に入ってたから。」

「明日、忙しいのか？」

「うん…1日目は忙しいな。2日目はまだ大丈夫そうだけど…」

因に、文化祭は1日目に各クラスでの出し物や発表、2日目はグラウンドを利用した模擬店やバザーになっている。

私のクラスは1日目に劇、2日目に模擬店の予定だ。

「大変だし、忙しいとは思っけど、自分が楽しめよ。」

「えっ…？」

突然のキミの言葉。

「優梨さ、無理してない？っていうか責任感強すぎな上に細かい所気にし過ぎ！確かに、お前の仕事はみんなを楽しませるものだけど、お前も楽しめなきゃ文化祭は成功しないぜ。」

キミはなんでもお見通し。

無理してたよ、たくさん。嫌だったよ、委員会。

でも、気付いたら決まってる、自分はやらなきゃいけないんだって思い込んだの。

「あのさ、2日目、俺とまわらない？いろんなとこ。」

「

「えっ…？」

キミがこっちを向く。

真っ直ぐ私を見る。

「好きだ。」

キミは、今何て言ったの？

「俺、2年で、同じクラスになってから…お前ばっか見てた。」
ねえ、これって…告白？

「もしよかったら…俺たち付き合わないか？」
付き合う？彼氏と彼女になるって事？

「あっ…あの…私…」
なんで？なんで言えないの？私も“好きだ”って…

「返事は…今度で良い。」

…じゃあ…また明日。」

そう言いながら、キミは帰って行った。

キミは私の事、好きだったの？

私、キミの事、1週間前まではなんとも思ってたんだよ？

それなのに…2年生になってからずっと？

キミはずるい。

私の心を惑わせてばかり。

私は…自分が嫌になるくらいキミが好き。

心なんて…ずっと前からキミに渡してる。

前野良平 聞くと愛しくなる名前、聞いただけで優しくなれる名

前。大事な大事なあなたの名前。

キミとわたしのきもち

キミは言った。

私の事がスキだって。

でも…私は何も言えなかった。

キミ昨日、告白された。

1週間前からスキになった私。

半年以上も前から私をスキになつてくれてたキミ…

こんなに自分かもしかかった事、なかった。

でも、今日、キミに言うよ。

キミがスキって。

「…っという訳で、今日の動きはこんなカンジです。」

先輩の声。今は開会式の後で、

委員や係が今日の動きの説明を受けている。

「それから、変更がひとつだけ。」

みんなが顔を上げて先輩を見る。

「有沢さんが2年のクラス発表の時の受付係になってくれました。」

みんな、一斉にこつちを見る。私は小さく、

「お願いします…」

と言うので精一杯だった。

「ええ…?! 優梨、劇見らないの?」

1年生最後の組が出し物をしてる。私たちのクラス発表まで、あと15分。

本番用に準備万端な亜花莉が素頓狂な声を上げる。

「うん…なんか、ちよつと2年の出し物の時に受付係がいなくて…」

「いくら人手不足だからって…優梨が行かなきゃいけないなんて…」

「ホントにごめんね。でも、委員会でビデオ録ってるから後で見せてもらう。」

「そっか…まあ、委員会の先輩、怖そうだしね…」

「まあね。」

二人で笑いあう。

「優梨に私の勇姿見てもらえないのは残念だけどさ、優梨のそーゆーところ、好きだよ。」

「ありがとう。亜花莉、がんばって！セリフとちったら恥ずかしいよ。」

「優梨こそ、パンフ渡し忘れちゃ恥ずかしいよ。そっちもがんばってね。」

劇がはじまった。亜花莉の声が聞こえる。

受付係の席には、私だけ。

空しくなつて溜め息。

ふと正面をぼーっと見つめる。遠く、小さく見えるのは、あの紅葉。昨日よりもまた葉っぱが減ってる。

そういえば…キミに今日、まだ会ってない。
さびしいよ。キミに会えないのは。

昨日の告白さえ、嘘みたいに思えてくる。
また溜め息。

そんな時、後ろの方で懐かしい声が聞こえた。

「こらっ、ちゃんと仕事しろ。優梨。」

慌てて振り返る。

キミだ。キミがいた。

「なんで？」

まだ、劇の真っ最中。それなのに…

「北里に聞いた。優梨、一人でここにいて…」

「亜花莉が…」

「今日、優梨と話してないなって思ってたさ。」
私もだよ。

「そうだね。…とりあえず、おはよう。」

「9時半におはようって言われてもなあ…」
くすくす笑いだすキミ。

「ははは。やっぱり優梨は面白いな。」

「そっ…そうかな…」

顔が赤くなるのが自分でも分かるよ。

ちよつと沈黙。

キミが口を開いた。

「…昨日の…事だけど…」

私はうつむいてしまった。キミがこっちをはっきり見つめるが分かったから。

でも、これじゃだめだ。

キミの事、スキって伝えなきゃ。

このままじゃ、絶対後悔する。

キミをじつと見つめる。キミは少し驚いているね。

心臓は爆発寸前。

顔が熱い。

「私も、良平君が…好きです。」

また、ちよつと沈黙。

信じられないって顔してるキミ。

「って事は…？俺たち両思い？」

「…そうなるのかな…」

「マジで？嘘じゃないよな？」

「うん。」

私がそう言うと、キミは私を抱き締めた。

「俺、今生まれてきて一番嬉しい。」
私も。

キミのぬくもりが…直接私に入り込む。
あったかい。

しばらくしてから、きみは私を放して、聞いた。

「…ところでさ、優梨はいつから俺が好きになったんだ？」

「えっ…」

一番聞かれくない質問…

「実はね…一週間前なの…」

「へっ？一週間前？」

素頓狂なキミの声。

当たり前か…驚くよね…そりゃ…

でも、キミは別の事で驚いてた。

「一週間前っていうと…あの雨の日の？」

「…そう…傘貸してくれた日…良平君のこと、はじめて知れた日だし…傘まで貸してくれて…優しいなって…」

私がそう言った瞬間…キミは笑い出した。

話がさっぱり分らないので、キョトン…としてたら、キミが笑いを堪えながら言った。

「ごめんごめん…俺さ、あの日、優梨に嫌われたと思ってたんだよ。」

「えっ…？なんで？」

「だって…穴の開いた傘、貸したんだぞ。絶対嫌なヤツだと思われたと思うたんだよ。」

「…私、そんな態度だった？」

「いや、優梨は思ってたのと正反対でさ、でも印象悪くなったろうなって思ってたんだよ。」

「全然。なんか面白かったし。」

「俺に言わせれば、お前が一番面白いよ。」

そう言つとキミはまた笑った。

私も笑った。

こうして、私とキミは恋人同士になれた。

ありがとう。

これからよろしくね。

「有沢さん、受付係、交替します。すいませんでした！」
そう言つて、1年の後輩がきた。

「あ、はい。」

それじゃあ、クラスに戻ります。」

なぜか、年下に敬語…な私…

「優梨、行こう。」

キミと、体育館に向かった。

「優梨、あのさ、明日だけど…」
入口の近くでキミが言った。

「明日、空いてるときに…一緒にまわらないか？」

「うん。そうしよう。私昨日言われた時からそうしたいなって思ってたし。」

「よしっ、んじゃあ約束だぞ。」

「うん。約束！」

「よし、良かった…あ、それじゃ、田辺が呼んでる。またな。」

田辺君は、良平君の友達で、亜花莉の彼氏。

「うん、またね。」

良平君と分かれたところで、亜花莉が追いかけてきた。

「優梨！さっきのって、前野だよね？なんかあったの？」

「…告白されて…付き合う事になったの。」

「良かったじゃん！好きだったんでしょ？前野の事！」

「そうなの。良かった…」

キミの笑顔が見える。とても眩しい。

前野良平…キミの笑顔、心から守りたい。そう思える名前。

大好きなキミの…大切な名前…。大好きなキミの…大切な名前…。

キミというヒト（前書き）

6話めにしてはじめて前書きをしました。

今回は優梨と亜花莉の会話中心です。いつもとは少し雰囲気を変えてみました。

良ければ読んでやって下さい。

キミといっしょ

まだ胸がドキドキする。

まだ、キミのぬくもりが残ってる。

キミと両思いになれた。信じられないけど、本当。

「まさか、前野と付き合うとはね」

文化祭の1日目の日程が終わり、亜花莉との帰り道。

「あのさ、前野って、結構人気あるのよ。知ってるでしょ？」
知ってる。だって私の彼氏だもん。

「うん。優しいし…スポーツとかもできる方だしね。」

「それだけじゃないよ。顔よ。イケてる方なのよ。」

あ、顔かあ…キョーミないんだけどな…

「うん。カッコ良いよ。」

「ま、だから大概の女子は好きになる訳よ」

私は…キミの外側が好きになった訳じゃないんだけどな…

キミの優しさに触れて…キミの側に居たいと思って…ただそれだけ…

「なんかそれって…動機不純。外見とかばかりって…」

「所詮、女ってそんなもんよ。じゃなきゃなんでアイドルなんかに熱上げんのよ。」

…まあ、確かに。

「それじゃ、

良平君って…告白とか…いっぱいされたのかな…」

「そりゃね。私を知る限りじゃ、優梨と付き合うまでにフタケタはあるね。」

…すごいな…良平君…

「…でもね…」

ふふふ…と、亜花莉が不敵に笑う。

「…なによ？」

「前野の断る時の決まり文句、教えてあげようか？」

…えっ？

「『俺、気になる奴がいるんだ。俺の片思いかもしれないけど、今はそいつの事しか考えられない』…だつて！」

…一方的な片思い…まあ、一方的なのが片思いなんだと思うけどそれって？…私？

「それ、ホント？」

「真章まさふみが言っただから間違えないわよ。」

真章君は、田辺君の下の名前で、良平君の友達兼亜花莉の彼氏。

「…好きな奴つて…」

「決まってるでしょ。優梨よ。それしかないじゃない。今日まで、誰の事か分からなかったけどね。」

キミが、私をずっと前から好きだったの、ホントだったんだね。

キミに、見向きもしなかった私…

それなのに、わざわざ告白してくれた子を断ってくれていたんだね。

好き。スキ。すき。…好きだよ。キミの事。

「まあ、これで、晴れてあんたたちもカレカノね」

亜花莉が、いたずらっぽく笑う。

私は顔が赤くなる。

「なんか、照れる。彼氏…とか。」

「初々しいね。あんたら。」

溜め息をつきながら亜花莉は言う。

「なんか、純愛小説をタダで見せてもらってるカンジ。」

「

「純愛だなんて…亜花莉にも彼氏いるじゃん。」

「誰も真章より前野が良いなんて言っていないわよ。でも、付き合い始めの頃を思いだすな…」

そう言いながら遠くを見つめる亜花莉。

幸せそうな…満たされた笑顔。

「あんたたち、明日、2人でまわるんですよ。」

急に話題と態度が変わる亜花莉。

「うん。空いてる時間につて…」

「んじゃ、ダブルデートしよう。ちょうど4人とも同じ係だったじゃん。」

私たちはバザーの集計係。

だから、始めと終わりだけの仕事で、仕事の無い時に二人でまわる約束をしたのだ。

「そうだね。楽しそう。」

「でしょ。真章に、前野に伝えてくれる様に頼んどくから。」

「うん。分かった。じゃあ、明日は4人で。」

「よっし、決まり。そんじゃ、また明日！」

そう言つて亜花莉は分かれ道を右に曲がった。

「うん。また明日！」

私は左に曲がる。

ポケットから、メモ帳を取り出す。

その中に、大切に挟んでいる紅葉。あの時の紅葉。

沈んでいく夕日にそつと透かしてみる。

紅葉の朱と太陽の赤がキレイだ。

前野良平…照れてしまうけど、私の彼氏の名前。

ずっと前から私を思っていてくれた、キミの名前。

キミというヒト（後書き）

いかがでしょうか？今回は会話ばかりでした。次回はとうとうダブルデートで、今から私自身もドキドキしています。

小説を読んでの感想やアドバイス、評価等、して下さると助かります&嬉しいです。

それでは7話でお会いしましょう！！

キミとつないだ、てのひら

ずっと、ずっと私をスキだったキミ。

ずっとキミがスキだった私。

やっと両思いになれた。

文化祭2日目。今日はキミとずっと一緒。

…これってデートかなあ…

こんな自問自答を、昨日から何回繰り返したかな。

「優梨！おっはよう！！」

いつもの明るい声で声で亜花莉が声をかけてきた。

「おはよ。今日、楽しみだね！」

「うん。っていうか、あんたたち、今日のが事実上初デートな訳？」

初デート…その言葉を聞いただけで顔が熱くなる。

「おっはよう！優梨！！」

キミが来た。

いつもと同じで、明るい声。

ただ、いつもと違うのは私たちの関係。昨日の朝は友達同士で、今日からは恋人同士。

「真章から聞いた。今日、4人で回ろうって。」

「うん。楽しみだね。」

「…。」

「？どうしたの？」

「どうせなら二人つきりがよかった…」

「…でも、私たちの事はまだみんな知らないし…」

『キミは女子から人気があるから。』

言葉を途中で飲み込んだ。

そんな事、キミに言えるはずがない。

「そーゆーのって、関係あんのかなあ…俺は別に気にしないんだけど…」

「…そーゆーもん。」

言葉に詰まる私に、亜花莉の助け船。

「いい、前野。あんた、文化祭最終日『ラブラブなデートなんて、あんたちぐらいなのよ。みんなバカップルだけだと思わないで。』

「バカップルとはなんだよ。それはお前らだろ。」

「なによ。恋愛初心者のかせに今年で3年目の先輩に向かってその態度。」

「れ…恋愛初心者…」

「まあ、あれだ。俺たちはバカップルなんてとうに過ぎてるんだよ。」

田辺君が口を挟む。

「だから、俺たちに向かって何でも知ってるような口きくなよ。」

「まっ…真章い…」

「有沢、コイツまだまだ考えの浅い3歳児だけど、よろしくな。俺からも頼むわ。」

「なんだよ。お前らまで。まあ、いいよ。その代わり二人つきりにさせるよ。」

「はいはい。」

と、亜花莉。

「おアツいねえ。秋なのに、夏に戻ったか。」

…と、田辺君。

私は笑った。同時に言葉に詰まる私を見てフォローしてくれた二人に、感謝した。

二人つきり…いつその場面が来るか分からないけど…そんな時、私はどんな顔をしたらいいの？

キミの事、スキだって言い切る自信、あるよ。

キミと話したいこと、伝えたいこと、知りたいこと…でも…

もし会話が途切れたら？

もしキミが嫌がる話をしちゃったなら？

…そういう時は、どうすればいいのかな。

こうして、キミの事で一喜一憂する。

これって、きつとすごく幸せな事だよね…

「はい、じゃあ集計係は今のところこれでOK。後は全部終わってからまたお願いします。」

クラス委員長・松下さん。バザーを総合的に取り仕切っている人。私たちは集計係で、今のところ仕事は無い。なのでこれから自由時間。

「ちよつと、優梨。」

亜花莉が私を呼び出す。

「なあに？」

「あのさ、ホントに二人が良かったら、私たち退散するけど…いいの？」

「いいの。亜花莉たちが居てくれると安心だし…」

「そう？なら良いんだけど…」

きつと、亜花莉は私の浮かない顔を見て、二人にしたほうが良いと思っただろう。

でも、私が考えてるのは正反對。

これって…キミに凄く失礼だよね…

小さな溜め息を、みんなに聞こえないようにそつとした。

文化祭は最終日ということもあってか、昨日とはまた違う盛り上がりだった。

亜花莉と田辺君が前、私とキミがその後ろ…

私は口数が少ない…

キミは田辺君や亜花莉と話している。

私のこと、つまらないヤツって思ったのかな…

そんな時、急にキミが私の手を掴んだ。

…といつても、急だったから手首…に近いけど…

「?!…良平くん…?」

「わりい、俺、やっぱり優梨と一緒にいる。」

「良平…」

田辺君も驚いている。亜花莉も。

でも、一番ビククリしているのは私。

私の手首を掴んで、キミは人込みを避けて校舎裏に…あの紅葉の木の場所に…

「…良平君…?」

「…」

キミは何も言わない。

…キミ、怒ってる。

言わなくても、何となく分かる。

背中を私に向けて…キミは口を開いた。

「なあ、俺といても…楽しくないか…?」

「…えっ?」

「だって、優梨…俺といつもみたいに話してくれないじゃん。」

「それは…」

どうしても、キミと話をする前に…悪い事を考えてしまう。

「あのさ、嫌ならはつきり言ってくれよ。俺が嫌だったら…無理に付き合ってくれなくていいよ。」

「そんな…無理してないよ。」

「じゃあ、なんでダブルデートにしたんだよ。俺と付き合ってるのは恥ずかしい事なのか?」

「そんな事ないよ!…ただ…」

「ただ?」

…もう、言った方がいいのかなあ…

「…良平君…女子から人気あり過ぎなの。」

「えっ?!」

キミの驚いた顔。相当予想外だったみたい。

「自覚、無いかもしれないけど…そうなの。だから…私が彼女って知られたら…」

「…理由、それ？」

この際…はつきり言っところ。

「口数が少ないのは…話をしようと思っても、その場の雰囲気とか壊したら嫌だから…そう考えたら話できないの。」

…それを言い終わったら…キミは急に笑い出した。

私は脱力。紅葉の木の側に座り込んだ。

「悪い悪い。…でも…そんなことで…」

「そんなことじゃないよ。真剣に悩んでたんだから。」

「…あのさ、」

急に真面目な顔になったキミ。

「女子から人気があっても、そんなこと関係ないんだよ。実際に付き合ってるのは俺たちだろ。」

真剣なキミの瞳。

「そうだけど…」

それでも、まだ煮え切らない態度の私。

「それとも優梨は、俺が優梨の事を口々に守れない様なヤツだと思ってるのか？」

「そんなことないよ！」

そう言うと、キミは私の頭を包み込む様に抱き締めた。

「俺さ、不器用なんだよ。」

キミが、耳元でそつと囁く。

「もし器用なヤツなら、さっさとお前がスキだって言えるよ。でも俺はそれが出来なかったんだよ。」

キミの声を、全身で感じる。

「でも、俺、お前を守る自信はある。」

そう言うとキミはまた私を見つめる。

「だから、優梨には何でも言って欲しい。良い事、嫌な事、悲しい事、悩んでる事…」

キミの優しさが…キミの言葉に乗せて…私に流れていく。
私は何を悩んでいたんだろう…

キミはこんなにも私を思っていてくれるのに…

「私も…自信あるよ。」

キミを見つめる私。

優しいキミのまなざし。

「自信？」

「そう…良平君が世界で一番大好きでいられる自信。」

いたずらっぽく笑う私。

キミもほほ笑む。

「これからもよろしくな。俺、真章の言うとおり…3歳児かもしれないけど…」

「何歳でも構わないよ。私が良平君より精神年齢、高ければ良いんだもん。」

「コイツ…言っただけ…」

キミが頭を優しく私の頭にくつつける。

キミの顔が近い。

ついこの前までは考えられなかった事。

これからも…擦れ違ふ事、勘違いする事、仲違いする事、あると思う。

でも、それでも、キミと一緒に居られるなら…乗り切れそうだよ。
こんな私を…これからもどうぞよろしく。

「…そろそろ行くか…何気に昼時だし…」

「うん。ちよっとお腹減ったね。」

「ちよっと？俺はかなり…」

「そうなの？なら、模擬店にでも食べに行こうか？」

「おっし、決まり！行こうぜ。」

左手を差し出す私。

ほほ笑みながら右手をだすキミ。

キミのぬくもりが…手のひらから伝わる。
あったかいよ。

このぬくもりを、ずっとずっと…感じていたい…

模擬店の前に、亜花莉と田辺君がいた。二人とも昼食をとっていた。

「有沢！良平！！」

「あんたら、どこ行つてたの？…急にいなくなつて…」

「プチ喧嘩と仲直り。」

「プチ喧嘩？なんだ、それ…」

「読んで字の如く。ま、仲直りの方が多いけどな。」

「ま、悪い方にいつてないなら別に良いわよ。」

「そーそー。俺たち、それなりに回れたしな。」

「なんだそれ…俺たちの事…心配じゃなかったのかよ…」

「別に。だってもう高校生じゃない。」

「それに、3歳児には説得とか正論は通じないしな。」

「おっ…お前ら…よくも又ケ又ケと…」

「有沢あゝ…これからもこのお子様が今日以上に迷惑かけると思うけど、見捨てないでやってな。」

「ホントよ、優梨。前野は大変よ。なにせ、勉強さっぱりなスポーツ&バスケバカなんだから。」

「悪かつたな。」

私はクスクス笑い、

「まあね。それも覚悟の内よ。」

とイタズラっぽく笑った。

「おいおい、優梨もかよ…」

ちよつと脱力気味なキミ。

でも、目が笑つてる。

「優梨、別の店いこ。コイツらと一緒にじゃロクに食えやしない。」

「好きな所に行きなさいよ。誰も引き止めないから。」

「へーへー。優梨、アイツらほっといて行くぞ」

「有沢く頑張れよ」

「優梨く達者でね」

「ほっとけ。」

「じゃあね。また終りごろにね。」

キミと手をつなぐ。

手のひらの感触が、まだくすぐったいけど、心地良い。

前野良平… あったかくて、優しくて、心地良い… ずっと一緒に居たいと思うキミの名前。

キミとつないだ、てのひら（後書き）

いかがでしたか？今回は文化祭の前編でした。次回は後編です。もし、感想等あれば教えて下さい。それではまた！

キミとたこやき

キミとつないだ手があつたかい。

キミとのこの時間がとても愛しい。

キミとの絆を確認して、幸せな気分。

「優梨、どこで食べる？」

「どこでも良いよ。空いてる所にしよう。」

「おう。」

こんな、何気ない会話が嬉しい。前は考えられなかった事。

「あ、ココ空いてるぞ。」

「んじゃ、ここにしようか。」

着いたのは1年生の模擬店。タコ焼き屋だった。

「よし、一番多いのにするぞ。」「えっ…それって、12個入りの

？大丈夫かなあ…」

「二人で半分づつだから6個ずつじゃん、余裕だろ」

「え…大丈夫かなあ…」

「優梨は大丈夫だって」

「優梨はって…何よ…私そんなにたくさん食べないよ…」

「ま、余ったら俺がくっちゃる。ちよつと待ってて。買って来るから」

そう言つて、キミは屋台に走る。

ふと空を見上げた。

綺麗な秋晴れだ。

少しのびをした。

この時間が…いつまでも続いて欲しいと願つた。

「優梨っ！買ってきたぞ！」

笑顔でキミがこつちに来る。

「ありがと。ごめんね…買いに行かせちゃって…」

「んな事気にすんなよ。それより、どこで食べようなあ…」

「別に、どこでも良いよ。あ、その階段にしよう。」

私が言ったのはコンクリート製の木陰にある階段だった。でも階段数は3・4段ほどだった。

「よいしょ。」 階段に腰掛ける。

ひんやりと冷たい。

「ほら、優梨。」

そう言ってキミはタコ焼きのパックを差し出す。

「んじゃあ、頂きます。」

「ほいほい。」

爪楊枝をタコ焼きにさした。以外に重い。

なぜか、キミは笑ってる。

タコ焼きを口に入れた。

「…。」

「どうだ？うまい？」

「…。」

とても喋られる状況じゃない。

なぜ口の中に、大粒のタコがあるのか理解できなかった。

…キミはやっぱりやにやしてる。…やられた。

「もう、良平君！このタコ焼き何？！」

「何って？」

キミのクスクス笑いは止まらない。

「タコ焼き！こんなおつきなタコが入ってるなんて聞いてないよ！」

「なんにも入ってないよりは良いだろ。」

私は少しふくれながら、

「…いじわる…」

と言った。

キミは少し笑って、

「ごめんごめん。でも、優梨はやっぱりかわいいな。」
と言った。

みるみるうちに顔が熱くなる。

キミをみれない。

「でも…食べる…」

そう言つて私が新しいタコ焼きに手を伸ばすと、キミは言った。

「…なあ、『あーん』、して。」

「えっ？何それ…」

「だから、食べさせて。俺に。」

「ええっ！」

思つてもみなかった。そんな光景は有り得ないと思つてた。

「い…嫌だよ…恥ずかしいよ…」

「いいじゃん。誰もみてないし、はい、あーん…」

そう言つてキミは口を開ける。

「しょ…しょーがないなあ…これじゃ、ホントに3歳児だよ…」

そう言いながらも、キミの口へタコを運ぶ。

「…ん…うまい！確かにタコでかいな。ははは。」

キミが笑う。こんなにも近くで。

次の瞬間、私はいきなり笑い出した。

「えっ？なんだよ…どーした？」

私は笑いを堪えながら、やっと言つた。

「…だつて…青ノリ…前歯に…付いて…んだもん…あゝ、苦しい…」

「えっ…マジで？」

キミは急いで爪楊枝で青ノリを取つた。

「おい、もう青ノリ取れただろ。」

キミは『イー』と白い歯を見せる。

その仕草がおかしくて私はまた笑う。

「…なんだよ…優梨…笑いすぎだよ…」

「ごっ…ごめんごめん」

ようやく笑いが落ち着いた。

「なんかさ、良平君って、いいなあ…って思ったんだ」

「えっ?」「初めて話した日、傘貸してくれたじゃん、でもあれは…」

「穴…開いてたな…」

「それと同じで、なんていうんだろ…あつたかいつていうのかな…和むなあつて。」

「そ…そーゆーもんかな…」

「他の女の子は分らないよ。でも、私は良平君のそんなところ、スキだよ。」

そう言つとキミは、

「そおか?ま、優梨がスキでいてくれたら別に良いんだけどな。」

と、タコ焼きを頬張りながら言った。

私ももう一つ食べた。

キミと並んで…キミの隣りで食べると、いつものタコ焼きが…ちよつと違つた。

最も、タコの大きさはいつもと比べるとかなり大きいけど。

タコ焼きを食べ終えた頃、放送がかかった。

『そろそろ、2日目の日程の終了時間です。生徒の皆さんは、後片付けにとりかかりましょう。職員は…』

「えっ!もうそんな時間か?!」

「…ホントだ…タコ焼き食べてたら終わっちゃったよ…」

「集計係って、この放送があつたら教室で売り上げ計算するんだよな?」

「うん。亜花莉と田辺君も一緒に…」

「あーあ…結局俺たちって、少しケンカして、仲直りして、タコ焼き食べて終わりかあ…」

「いいじゃん。楽しかったよ。」

「そうか？優梨がそう言うなら良いけど…」

「…良平君は？」

「えっ？」

「今日、楽しかった？」

「勿論じゃん。優梨と一緒に楽しくない訳ないじゃんか。」

そう言ってキミは、また笑う。

キミの笑顔が眩しい。

「あのさ、優梨。」

急にキミが真面目な声で言う。

「なあに？」

「いつかさ、ちゃんと…デートに誘う。」

「うん。楽しみにしてる。」

「ああ、その時はもう少しビシッとキメる様にする。」

「なんで？そのままが良いよ。」

「えっ？」

「今日みたいに、リラックスした、そのままの良平君と、デートしたい。」

「…そうなのか？」

「うん。肩の力抜いてさ、今日みたいな笑顔、もっと見せて。」

「…優梨ってやっぱり面白いヤツだよ。」

キミは笑う。

「なによ。私はね、2枚目のカッコつけより3枚目の人の方が好きなのよ。」

「…そうなんだ。」

キミはやっぱり笑う。

「なっ…なによ…」

堪え切れなくて、私も笑う。

幸せな瞬間。

こんな瞬間…キミと一緒に…もっと味わいたい。

「…行こう。二人とも、待ってる。」

今度は、私が左手を差し出す。

キミはほほ笑んで、右手をつなぐ。

突き抜ける様な青い空に、今日は、背伸びしたら届く気がした。

「おっ、ラブラブカップルが帰ってきましたよ。」

「おっ。どうだった？」

教室に行くと、すでにみんな帰り、亜花莉と田辺君だけが残っていた。

「ごめんね…遅くなっちゃって…」

「いいのよ。別に。ところで、どーだったのよ。前野と、どこ行ったの？」

「うーん…タコ焼き食べたかな。それだけ。」

「はっ？それだけ？他には？」

亜花莉の目が、真ん丸になる。

「…行つてないよ。」

「おやおや。あれからずっとタコ焼き食べてたの？キミたち。」

呆れたような口調の田辺君。

「そーだよ。悪いかっ。」

「…別に。ま、良いんじゃない？」

「亜花莉たちは？どこ行つたの？」

「当たり前よ。ほとんどのクラス回つたわよ。」

「タコ焼き食べたけど…そんなに時間かけて食べたの？1つ食べるのに何十分かけてるのさ。」

「別に良いだろ。」

「まあ、部外者は口を挟まないけどね。」

「優梨、それで満足なの？」

「うん。勿論。なんで？」

「…だめだこりゃ。」

亜花莉は呆れた様に溜め息。

「筋金入りのバカップルだな。」

田辺君も溜め息。

「別に良いだろ。また改めて別の日にデートするよ。」

「そーなんだ…」

亜花莉が、ニヤリと笑う。

「…なっ…何？亜花莉…」

「べえゝつにいゝ。あんたたちには敵いません。もう、勝手にやってて。」

「そーそー。一緒に居るとヤケドしちゃう。」

「なっ…」

キミは言葉に詰まる。

「はいはい、キミたちの話聞いてるとね、歯がぐらぐらするの。」

「そうそう。どうせ、その様子だとバザーに、顔すら出さなかったんでしょ。だから最後の仕事ぐらいはきちんとやりなさい。」

「はあゝい。」

私たちは、二人でそろって返事をした。

集計が終わったのは、文化祭が終わってから2時間後だった。

辺りは真っ暗。

「…優梨、送ってく。」

「えっ？だって…反対方向じゃ…」

「いーんだよ。危ないし、もう少して部活再開だから、今から足腰鍛え直さなきゃな。」

「大変ねえ…遠距離恋愛は。」

「亜花莉…これは遠距離なの…？」

「逆方向も、立派な遠距離恋愛よ。」

「俺たちは、二人共東町だもんな。」

「だから中学も一緒なのよ。東中。」

「そうなんだ…」

「ま、大切なのはさ、どこに住んでるかじゃなくて、どれだけ好きか…って事じゃん。」

どこか熱心な視線の田辺君。

「真章、お前、たまには良い事言っな。」

キミは、感心した様な表情。

「悪かったな。お前程言っの、たまにじゃないぞ。」

「なんだと…」

「はいはい、ケンカはおしまい。ほら、真章、行こっ。」

亜花莉の言葉で、私たちはお互い分かれた。

「じゃあね。」

「うん。また明日ね。」

「良平、ちゃんと有沢守ってやれよ。」

「当たり前だろっ」

…二人で並んで歩く。

空には、三日月。

「…三日月だねえ。」

「ほんとだ。満月じゃないのか…」

「良平君、満月が好き？」

「うん…三日月も嫌いじゃないけど、どうせなら月そのものを全部見たいじゃん。」

「ふふふ。良平君はらしいね。」

「そう？」

二人で笑いあう。

「そう言えば、前にも送ってもらったよね。」

「そうだな。あの時はまだ、付き合ってたけど。」

「不思議だね。ホント、ついこの前だよ。」

「ホントだな。…あ、あれじゃないか？」

家の前に着いた。

「送ってくれてありがとう。気をつけて帰ってね。」

「おう。今日は楽しかった。ありがとな。」

「私もだよ。…デート、改めて楽しみにしてる。」

「ああ。俺も楽しみ。」

「そうだね。…それじゃあ…また明日…」

「おっ！んじゃな！！」

キミはランニングをするかのように、軽やかに走って行った。
少し夜風が冷たい。

なんだか、新婚カップルの気持ちが分かった様な気がした一日だった。

笑々と白い歯が見えるキミ。

たくさんの宝物をくれるキミ。

…前野良平。幸せな瞬間をくれるキミの名前。

キミとたこやき（後書き）

今回は、いつも以上に甘々してみました。目標は新婚カップル（笑）

感想やメッセージ等、あれば是非下さい。そして、よろしければ評価もして下さると嬉しいです

今回は新展開を考えています。もし機会があれば見てやって下さい

キミのとなりにいてもいい？

キミと話をする。

キミの笑顔を見る。

キミの泣き顔を見る。

キミと一緒にいる事を夢見て…願って…やっと叶った。これから
もよろしくね。

「優梨！」

朝一番。キミの声。

急に幸せになれる、大好きな声。

「おはよう。良平くん！」

「あのさあ…デートの事なんだけど…」

キミは少しうつむき加減で言う。

私もまじまじと見れないけど、多分同じ。顔は真っ赤。

「うん…」

「今週の…土曜日にしないか？その日…ちょうど部活休みで…」

「土曜日？大丈夫だよ。」

「ホントか？」

キミは、さつきとは正反対。嬉しそうに私の顔を覗き込む。

「うん。土曜日、デートしよう。どこで何時にする？」

「実はさ、アネキが遊園地のタダ券くれたんだ。」

「お姉さん？良平君、お姉さんいたんだ…」

「といつてもとくに成人してるけどな。んで、そのアネキが彼氏
と遊園地に行く予定だったけど、彼氏の方が急に入院したんだよ。」

「ええっ！入院？大丈夫なの？」

「軽い盲腸だつて。でも、有効期限までに退院できそうにないから
くれたんだ。」

「そうなんだ。私、遊園地スキだよ。」「よっしゃ、んじゃ土曜日
に10時。迎えに行くよ。」

「遊園地かあ…懐かしいなあ…」

「そんなに行ってないのか？」

「うん。中2が最後だったから…3年くらいかな。」

「優梨ってさ、絶叫系苦手だろ。」

「えっ…どうして分かるの？」

「優梨って怖がりっぽいかなって。正解？」

「うん…当たり前…行くと絶対乗らないんだ…観覧車とかは乗るけど…」

「そっか。…実はさ…俺も苦手さ…」

「ええ?!」

「なんだか意外…てつきりキミは好きかと思ってた…。」

「…なんだよ…俺にだって苦手な物の一つや二つはあるんだよ。」

「そうなんだ…いや、なんか意外で…」

「なんかさ、あーゆーのって、心臓に悪いって」

「キミは少し言い訳。」

「私はちよつと笑う。」

「そうだね。乗る前の案内でさ、心臓の悪い人は乗らないでってアナウンスあるけど、心臓に悪いなら作るなって思わない？」

「あ、それ、同感!…やっぱ、優梨は面白いよ。」

「だからさ、それ、誉めて無いよ。」

「なんでよ?ベタボメの間違いじゃない？」

「…失礼な…」

「そう言っただけ私たちは笑う。」

「同じ話題で、同じ話で、同じ理由で笑いあう…これって、凄い事だね。」

「大好き。やっぱりキミが彼氏でホントに良かったよ。もし、切ない思いを『恋』というなら、キミを愛しいと思うこの気持ちは『愛』だね。最近、実感するんだ。」

「よっし、んじゃ土曜なっ!」

「うん。楽しみにしてる。」

「おうっ。可愛いカッコしてこいよ。」

「何よ。今で十分じゃない？」

私は冗談っぽい笑顔で言った。

でもキミは、真面目な顔で言った。

「うん。ホントにそうだな。」

一瞬言葉の意味が理解できなかった。

そして、私は顔が赤くなる。

「…そんな…冗談だよ。ちゃんとキレイにして行くよ。」

するとキミはいつものおどけた顔で、

「俺、セクシーなのよりよりキュートな方が好きだぞ。」

と言った。

「なにそれ…まあ、参考にするよ。」

と、私もまた冗談めいた言葉。

「ははは。んじゃ、期待しないでまったくよ。」

…そう言ってキミは去って行った。

キミの去っていく背中を見つめる。

ちよつと脱力。

キミの前で、緊張してる訳じゃない。

でも…きつと誰でもあんな事言われたらドキドキするよ。

「…いじわる。」

キミの態度が無意識でも…計算していたとしても…それは同じ事。

キミはいつも私の心臓の鼓動を焦らしてばかり…

キミを思うだけで、ほうら、また顔が赤くなるでしょ。

『セクシーなのよりキュートな方が好きだぞ』

…キュートねえ…

私にはそんな要素無いんだけど？

アイドルみたいに可愛くないし、スタイルも良くないよ…。

メイクもほとんどしない。服だって特にこだわりはないよ。

「ふう…」

小さな溜め息一つ…

「ええっ？なんですってえ？！」

「もう、亜花莉…そんなに大きな声出さないでってば。」

「だって、あんたねえ…」

今はお弁当時間。亜花莉と机をくつつけて食べる。

「初デートったら、一大事じゃない。」

「…だから聞いているんじゃない…亜花莉はどうだったのよ。」

「…ウチらねえ…」

亜花莉の顔つきが変わる。

その顔は前に見た、満たされた…遠くを見つめる様な顔だった。

「ウチらの初デートは夏祭りだったわよ」「夏祭り？」

「そ。私ら付き合ってまだ3日でさー。まだお互いを名前で呼ぶのも恥ずかしかったのよ。」

「ふうん…そんな時あったんだあ…」

「当たり前よ。それでさ、私浴衣着ていったのよ。でも…真章…何も言ってくれなかった…」

「何も？可愛い…とか…いつもと違うじゃん…とかも？」

「そ。言わなかったのよ。こっちは結構頑張って着付けたり準備したりしたのにね。」

そう言って亜花莉は苦笑い。

「ただでさえ付き合いはじめで会話もなかなか無かったのにさ、話のタネにでもならないかなって浴衣着たのに…」

「意外だな…田辺君ってずっと話してるのかと思ってた…」

「それは私も。友達の時はそうだったのに、恋人になったら急に態度変わっちゃって…」

「そうなんだ…」

「でね、祭りもそんなんじゃないあんまり楽しくなくて、真章がたまに友達と会って話し込んだりしたから私、人の少ない静かな所に行ったの。」

「えっ…田辺君に言わないで？」

「そ。無意識に見つけてもらいたかったのかな…とにかく一人で涼

「んでのたの。」

「そうかあ……」

スキな人が居て、結ばれて、楽しい時間を過ごすハズだったのに……私だけ置いてけぼりにされたら……

「私なら……きつと耐えられないよ……」

「でもね、そうしてるうちにだんだん空しくなってきたの。私は何を怒ってるんだろうつて。真章は悪くない。きつと私だって近くに友達がいれば話だしちゃうな……つて。」

「そっか……」

「それでね、帰ろうと思つて歩き出したら、いきなり物音がしたの。」

「

「えっ……」

「近くに人はいないハズだし建物もないから怖くなって走り出したら、いきなり声がしたの。真章の声で、『亜花莉！！』つて。」

「田辺君が……」

「息は切れてるし汗だくだし……こっちが『大丈夫？』つて言ったら、なんて言つたと思う？『蛭じゃないんだから飛んで行くなよ。』つて言つたの。」

「ふふふ。田辺君らしい。」

「まあね。それで、『ごめんね』つて言つたら『蛭は綺麗に光るんだけど、亜花莉は光らなくても綺麗だよ。』つて言ってくれた……」

「すごい……なんかドラマみたい……」

「それでね、話しなかつたのはどこ見て話していいか分からなかつたからなんだつて。」

「亜花莉は嬉しそうに話す。」

「ま、その後はあんたも知つてるとおりのラブラブカップルになりましたよー」

「そうだったんだ……なんか良い話。」

「でしよー。」

亜花莉は嬉しそう。

「ま、そーゆー訳で、初デートって大切なのよ。」

「…うん…」

分かってる。それは。

「…でも、私…可愛くなんてないから…せめて…」

「…せめて？」

キミの隣りにいて…恥ずかしくない彼女になりたい。

うつむく私に、亜花莉は私の気持ちがあつたかのように話かけた。

「…デートはいつ？」

「えっ…今週の土曜…」

「何時？」

「10時に迎えに来るって。でも…なんで？」

「土曜の8時に、私の家に来なさい。デートに行く格好だよ。」

「えっ…なんで…？」

「とにかくよ。ぜえ…ったいよっ！」

「うん…」

その日はそれで終わった。

それから、キミの事…キミとのデートの事を考えていたら…あつと言つ間に土曜になつてた。

土曜日・午前7時57分・亜花莉の家の前。

例えば亜花莉の家にはそんなに来た事は無かつたな…

ピンポン…と家のチャイムを鳴らす。

遠くの方で、ドアに近づく足音が聞こえる。それも、かなり早々と…

バンツ…！と勢い良くドアが開いた。

「おはようっ！優梨…！」

息を切らしながら亜花莉がやって来た。「おはよう…でも…どうしていきなり？」

「良いから早く入って！」

「うん…お邪魔します…」

そう言って私は亜花莉の家に入り、2階の亜花莉の部屋に行った。部屋に入ると、亜花莉のお姉さん・光里^{ひかり}さんがいた。

「優梨ちゃん。久しぶりっ。いらっしやい！」

「あ、光里さん。お邪魔してます。」

そう言いながら光里さんを見る。

光里さんは亜花莉と5つ年が離れていて、今は短大を卒業して化粧品店に勤めている。

とても綺麗で大人っぽい。亜花莉の大人っぽさは、多分光里さんの影響だ。

「さっ、早速始めましょうか。」

…えっ？

「さ、優梨、ここに座って。」

…ええっ…

「あの…一体…何？」

私は亜花莉と光里さんを交互に見比べた。

…なんか変な予感。

「優梨ちゃん、今日、初デートなんですってね。」

「え…まあ…」

「優梨、なあんにもしなくても十分可愛いんだけど、もっと可愛くして前野とバストカップルにしてあげる。」

…変に楽しそうな二人。…もしや…

「あの…もしかして…メイクとか？」

「それだけじゃなくてファッションとかヘアスタイルとかもよ。」

光里さんがいたずらっぽくウインク。

「んじゃ、優梨ちゃん、じっとしててね。」

それから、しばらくして、光里さんの手が止まった。

「さっ、できたわよ。優梨ちゃんっ！鏡みてみて。」

光里さんから手鏡を受け取る。

どうしてだろう。毎日見ているはずの自分の顔が…

「…これ…私？」

…別人みたい…

「可愛いって、絶対！！さすがお姉ちゃんっ。」

「ま、優梨ちゃんはアンタと違って元がいいのよん。」

「なによそれえ…優梨、どう？」

「…違う人みたい…」

いつもの私は髪は下の方で2つに結んでいて、顔もしているのは洗顔ぐらい。でも、鏡に写る私はパツチリとした瞳、キレイに塗られたファンデーション、可愛いピンクのチーク、グロスを塗った唇、ふわふわした髪…

…私…良平君の隣りが似合う彼女になれたのかな？

「私…可愛くなれた？」

「うん。すつごく。前野にはもったいない。私がデートしたいくらいよ。」

「ホント…？」

「ホント！！もつと自信持ちなさいよ！」

「そうよ、優梨ちゃん。」

光里さんが優しいまなざしで私を見る。

「ウチの店に来るお客さんは、みんなキレイだし十分そのままでも可愛いのに、自分に自信が持てないの。」

「自信？」

「そう。今の優梨ちゃんみたいにね。」

光里さんはほほ笑む。

「私の仕事は、そんな照れ屋さんの背中を、メイクをすることだよつと押してあげる事なのよ。」

「…後押し？」

「そう。だから、みんなそのままでも十分可愛いんだから、化粧をやり過ぎるとだめよ。自分に相応しい最小限のメイクをして、自分に自信をつければそれでいいの。」

「…光里さん…」

「でも、自信が有り過ぎるのも考え物だけだね」

光里さんはウインク。

「そ。だから優梨も、自信持ってデートして来なさい。」

「ありがとう、光里さん、亜花莉。」

9時57分。

ピンポン

私の家のチャイムが鳴る。

私はベッドの上に置いたバックを取り、玄関へ行く。

『すいませーん、優梨さん、いますかあ？』

外から聞こえる、キミの声。

私はドアを握る。

これから始まる、キミと私の時間。

前野良平…せっかちで、ちよつと短気で子どもっぽいけど…憎めない…それがかえって愛しい、キミの名前。

キミのとなりにもいい？（後書き）

今回は新キャラ・光里が登場しました おまけに亜花莉と真章の初デート秘話？も書いてみました

今回は、とうとう私も待ちに待ってたデート編 どんな話にするか考え中ですが、できる限りラブラブにしたいです

それでは、感想&評価、あれば是非下さい！（かなり嬉しいです！）感想等くださった皆さん、ありがとうございました。心から感謝します！それでは…

キミと初デート

ガチャッ…

キミがドアの前に立っていた。

「良平君…おはよう。」

…10時前だけどね。

「ゆ…優梨…？だよな。」

「…そうだよ。…ビックリした？」

キミの顔が紅潮する。そして呟く様に、キミは一言告げた。

「…可愛い…」

『可愛い』…その言葉、私に言ってくれているんだよね。

「ホント…？」

「言っただろ。」

キミはそう言いながらポンっと私の頭に軽く手を置く。「俺、キ

ュートなのが好きだよ。」

「うん。ありがとう。」

優しいね、キミは。

「ほら、優梨。」

キミは手を差し出す。

「うんっ。」

私はそつと手を重ねる。

やっぱりキミの手はあったかい。緊張がほぐれてゆく。

「今日さ、これからバスで行くから。直通の便があるんだって。」

「そうなんだ。乗った事あるの？」

「いや、無いよ。アネキに聞いた。」「そつか。でもなんか悪いな

あ…ホントは彼氏と行くんだっただんでしょ？」

「ま、大丈夫だよ。彼氏もだいぶ良いみたいだし。」

「そっ？」

「何？ずっと気にしてたのか？」

「うん…ちよつと…」

「優梨って、優しいな。」

「そう？」

優しい…それは、キミもだよ。

「あ、優梨の『ゆ』は、優しいの『優』だな。なんか、良いな。」

「…そう？良平くんは…イイ感じで平らで『良平』？」

「はははっ。なんだよそれっ。イイ感じねえ…あゝ、おもしれえ。」

「

「…んもう、冗談だよ…笑いスギ…」

ちよつと顔を背ける。

キミがあんまりにも笑うから…まともに顔合わせられないじゃん。

「あゝ、優梨、ごめんよ。でもあんまりにもオモシロすぎで…」

「…もう…」

膨れっ面になってみる。キミはちよつと慌ててる。

「怒るなよ…あ、ほら、バス停着いたぞ。」

私の家からそんなに離れていないバス停。

でも、キミと一緒に居たらいつもより近くに感じる。

「バス…何時？」

「あ、ちよつと待ってろよ。確か家に時刻表があって、持ってきたから…」

キミはカバンをぐそぐそ探る。中からはちよつとクシャクシャになった時刻表。

「あ、10時20分つてのがあるよ。今何時？」

「今17分。」

「んじゃあと3分だな。」

…あれっ？

「あのさ、良平君…」

「うん？」

「こつち、11時30分ってあるんだけど？」

私はバス停に貼ってある時刻表を指差す。

「ええっ！んなハズは…」

キミは時刻表をもう一回確かめる。

「あゝっ！！！」

いきなりキミが大声をあげた。

「…どうしたの？」

「これ…今年の春までの時刻表だった…」

ちなみに、今は季節は秋。約半年前の時刻表。

「あはははっ！」

今度は私が笑う番だよ。

「しょーがないだろう。朝、緊張してたし…焦ってたんだよ」

また赤くなる、キミのほっぺ。

「…なんか、良平君らしいよ…」

傘もそうだったよね。

「あゝ、俺ってなんでちゃんと最後まで決められないんだよ…」

キミはくしゃつと髪をかき上げる。

そして、がつくり肩を落とす。

その姿があまりにも惨めに思えて、私は笑うのを止めた。

「はあ…」

待ち合席のイスに深く座り込んで大きな溜め息をはく、キミ。

私はそつと、キミの隣りに座る。

「あのさ、笑ってごめん。良平君も、緊張したんだよね…」「当た

り前だろう。初デートなんだし…」

「そうだね…文化祭もデートってカタチじゃ無かったしね。」

「…それもあるけど…」

キミは言葉を詰まらせる。

「デートってモノ自体が、初めてなんだ。」

えっ？

「…そうなの？」

「恥ずかしいけど…」

キミは、またうつむく。

「…恥ずかしくないよ。」

「えっ？」

「だって、私も同じだもん。」

キミは、ちよつと意外そうな顔。 私は、勢い良くイスから立ち上がる。

「ホラ、いこう。 1時間、時間潰さなきゃ。 その辺に喫茶店かなにかあるよ。」

「…優梨…」

「もう、私は気にして無いからっ！ねっ？」

そう言つて私は手を差し出す。

さつきと逆だね。

「…やっぱ、優梨の『ゆ』は優しいの『優』だな。」

そう言つてキミは立ち上がる。そして私の手を握る。

私の手より、一回りぐらい大きな手。

あったかい手。

「うゝん…どうするかなあ…」

「次が11時30でしょ？ んじゃ5分前にバス停に行くとして…1時間弱あるねえ…」

「うゝん…」

「とりあえずさ、ウィンドウショッピングでも…」

「お、いいな。 さつすが。 んじゃこの辺の店、見て回るか。」

「うん。」

バス停の近くにはたくさんのお店がある。

「あ…」

私は雑貨屋さん前で足を止めた。

「可愛い…」

ペアリングだった。きつと二人で付けたら…

「…欲しい？」

キミは私の顔をのぞき込む。

「えっ、いや、別につ。」

私は慌てて反対を向く。

いきなり顔…近付けるなんて…ビックリするよ。

「あのさ、欲しいなら、ちゃんと言ってみるよ。」

「…。」

「欲しい？」

「…うん。…んじゃ、ワリカンで買…」

振り向いた。

キミは財布をカバンからごそごそと取り出して、さっとレジに並んだ。「…ワリカンで良いのに…」

ボソツと呟く。

キミが支払いを済ませた。

「はい、優梨。」

キミは指輪の入った紙袋を差し出す。

「…ねえ、ワリカン…」

「しなくていいのっ。ホラ、俺、金持ちだからねっ。」

キミはおどけた顔。

「…ホントに…良いの…？…なんか悪い…」

「そう？」

しばらくこつちを見る、キミ。

「なあ、ちよつと喉渴かない？」

おっ？

「よしっ、んじゃジュースおごる。ワリカンにならないけど…」

「いいのっ。ほれ、行くぞ。指輪ちょうだい。」

キミに私のよりも少し大きな指輪を渡す。

「おっ、なかなかカッコいいじゃん。」

「そう？へへっ、センスいいでしょ？」

「おう。あ、あそこに公園あるぞ。」

「ホントだ。自販機もあるし…あそこに行こっか？」

「ここも近所。小学生の頃ぐらいまではよく遊んだな…」

「私とキミは、噴水の側のベンチに腰掛けた。」

「じゃあ、ジュース買って来る。」

「おう。俺、サイダー系が良い。」

「了解っ!!」

「ぼかぼかと晴れた空。まさに運動会日和。」

「自販機の前に来た。」

「サイダー系ないなあ…」

「みんなジュースばかり。」

「いくらなんでもあるでしょ…」

「とりあえず辺りを見回す。」

「…無さそう。」

「どうするかなあ…」

「もう少し探してみることにした。」

「…すると、遠くで子どもの声がする。」

「お母さん、ジュース買ってえ」

「はいはい。」

「…あっちの方にあるのかな…」

「私は声のする方へ行く事にした。」

「ちよっと歩いた所に、自販機が見えた。」

「…あるかもしれない。」

「自販機を見てみる。」

「…あつた…」

「ラムネの缶ジュース。」

「私も同じものを買う。」

「気付けば、随分遠くに来た。キミは心配しているかも…」

「私は2本の缶ジュースを抱えて少し小走りでキミの所へむかう。ベンチが見えた。」

キミの姿も見える。

私の進むスピードも無意識に早くなる。

「ごめんね、遅くなって!!」

私は息を切らしながらキミに声をかける。

…キミから返事がない…

…怒ったのかな？

「良平…君？」

キミの顔をのぞき込む。

…キミは…

「ねっ…寝てる…」

心地良さそうに寝てる。

「…おいおい…」

私は隣りに座る。

…結構焦って買ってきたんだけどねえ…

「ふう…」

小さく溜め息。

ま、いつか。 ぽかぽかしてるし、遅くなったのも私が悪いし…

…キミの横顔を見ていると…こっちまで眠くなってきた…

「おい、優梨！優梨!!」

私は、キミの声で目を覚ました。

「ん…良平君？…あ、私、寝てた？」

「それより、時計見てみる。」

…えっ？なんか嫌な予感…

「12時…4分…」

やつちゃった…

「バス、行っちゃったぞ。」

「…もう…無かったっけ…？」

「…無い。」

「…マジっすか…」

「…ごめん、俺が完全に悪い。寝ちまつたし…」

キミは決まり悪そうにうつむく。

「…そんな…私も…ジュース買いに行くの…遅くなつたし…」

「いや…っていうか、ジュース何処まで買いに行つてたんだ？確か来る途中にあつたぞ。」

…それは…

「ごめんね…反対まで行つてた…」

「えっ？」

「…その自販機、サイダー無かつたから…」

キミはその言葉に驚いた。

「じゃあ…サイダー系無かつたから、反対の自販機まで買いに行つてたのか…？」

「…うん…」

「他のにしよう…とか、買つて来ない…とかは…考えなかつたのか…？」

「…うん…ごめん。」

怒つた？

呆れた？

…ごめんね…不器用で…

でも、キミは笑いだした。

「はははははっ！」

私はビツクリ。

「優梨って、本っ当に良いヤツだよ。参つた。」

そう言つてキミは、私の頭にポンつと手をのせる。

「…笑わなくても…」

「いやいや。ホント参つた。やっぱり、優梨、可愛い。おまけに良いヤツだよ。」

…面白いより…かなり良い評価じゃない？

「…ありがと…」

キミはまだクスクス笑う。

「あーあ。どーするかなあ…何しようなあ…」

「なんでもいいよ。あー…ジュース…ぬるくなっちゃった…」

「いいよ。家で冷やして飲む。」

「そだね。…それじゃあとりあえずごはん食べよっか。」

二人とも立ち上がる。

自然と手を繋ぐ。

「…あ…」

キミは何か見つけて立ち止まる。

「ちよつと待ってるよ。」

キミは走りさって行った。

…どうしたのかな？

しばらくすると、キミが戻って来た。手には白いパックを2つ持っている。

「あつちの方で見つけたから…」

そう言ってキミは私にパックを差し出した。

ほのかにソースの香ばしい匂い。…もしかして…

「たこ焼き？」

「あつたりー。なんかさ、文化祭思いださない？」

「ホントだね。」

…覚えてくれてたんだね。ありがとう。

「でもさ、買ってきたのはいいいけど、何処で食べようなあ…」

「…うーん…」

キミは辺りを見回す。私は考える。

その時、一つひらめいた。

「ねえ、私、良い所知ってる！」

「マジで？行こう。」

やって来たのは小高い丘。ウチの近所で、ピクニックに来た事があった。

「おー。イイ感じじゃん？さっすが。」

「まあね。ダテに住んでないよん。さ、座って食べよう。」
「おう。」

パックを開ける。

ソースの匂いがどこか懐かしい。

キミはたこ焼きを1つ、頬張る。

「ん〜んまいなっ!」

「ホントだね。おいしい!」

「だろっ。ナイスチョイスだな。さっすが俺!」
「…それ、自分で言うっ?」

私は少し笑いながら言う。

「だあ〜って、優梨、言ってくれるの?」

「ナイスチョイス。」

私は感情のこもって無い声で言う。

「おいおい。もうちょつと感謝してくれよ」

「冗談だよ。ホントにおいしい。ありがとう。」

「うん。なら、良い。ま、焼いたのはたこ焼き屋のおっちゃんだけどね。」

キミは白い歯を見せて笑う。

「おっ、今日は青ノリ付いてないね。」

「そんなしよっちゅう付けてないよーだ。」

キミは少しふてたような顔。

「…ふふふふ。」

「ははは。」

私たちは笑う。

幸せな時間。

やわらかな風が丘の上をやさしく吹き抜ける。

秋晴れの空、澄みきった空、穏やかな時間…

「う〜ん、食った食った!」

キミはそう言いながら腕をあげてのびをする。

「うん。おいしかったね。ごちそうさま。」

私も食べ終えた。

目の前に広がる景色を、しばらく私たちは眺めた。
のんびりとした時間。

「のどかだねえ…」

「なんだよ、年寄りくさいなあ…優梨…」

「悪かったね…」

「別にっ。可愛いから許すっ。」

「何、ソレ…」

「ところでさ、メイク、誰にしてもらったわけ？」
急に話題が変わる。

「えっ…」

「北里？」

「…うん。…分かった…？」

「なんとなく…」

「正確には…亜花莉とお姉さんの光里さんが、メイクしてくれたんだよ。」

「光里さん？」

「うん。短大を卒業したばかりの若くてキレイな人。今は化粧品店で働いてる。」

「へえ。」

キミは優しい、あたたかいまなざしで私を見ている。

「二人とも、私に自信を持たせてくれたの。」

「そっか。だって、可愛くなったよ。優梨。」

「…ありがとう。」

そう言って私はキミの肩へもたれた。

キミは私の肩を抱く。

「でもさ、優梨が可愛くなりすぎると、俺のハードルが上がるんだよなあ…」

「えっ？ハードル？」

「そっ。彼女が可愛すぎるとプレッシャーがねっ。」

「だって…良平君は…何もなくてもカッコ良いじゃん。」
「えっ？」

キミは意外な顔。

「だって…良平君は…カッコいいから女の子から人気あるし…私、良平君の隣りが似合う彼女になりたかったの。」

…正直な気持ち。

でも、キミは意外な言葉をかける。

「バカだなあ…」

「えっ？」

「隣りが似合わないのは俺の方だよ…優梨、可愛いじゃん。」

「可愛い。」

「可愛い。」

…キリなさそう。

「あー、もう、」

私はキミを見る。

「ならさっ、似合わないモノ同士のカップルって事でっ！」

「ぷっ…何ムキになってんだよ。」

「なっていないよ。…いじわる。」

私はちよつとふくれてみる。

キミは私を見る。

「あー、もう今日は優梨ちゃんにやられっぱなしですねえ。」

キミはごろん、と横になる。

「俺なんてさ、昨日寝る前にいろいろ考えて、結局寝坊して…慌てたらこの有様。」

「いーのっ。それで。良平君っぽい。」

「マジで？俺っぽい？そりゃ良かった。」

「もう、立ち直り早いよ。」

「いーのっ。それが取り柄だもん。」

「…そうだね。」

私も横になつてみる。

目の前には空がどこまでも広がる。

「…なんか…気持ちいい。風とか空とか。」

「そうだな…あ、折角だから腕まくらしてあげよっか？」
腕まくら？

私は勢い良く体を起こす。

「けっ…結構ですっ！」

キミも起き上がる。

そして笑う。

「動揺しちゃって。可愛いね。」

「きよっ…今日は可愛い言い過ぎ…」

…顔が熱いよ。

「だって、可愛いんだもん。優梨。」

キミはいつぱいの笑顔でこっちを見る。

…反則だよ…

「…もう…」

「…あのさ、」

キミは私に向き直る。目がさつきより真剣になってる。

「ズバリ、今日のデートは100点満点中何点？」

「えっ…そりゃあ…」

ちよっと考えて私は笑顔で答えた。

「もちろん、200点！」

キミは笑う。

「はははっ。100点満点って言っただろ。」

「いーの。100点プラス。マイナスよりいーでしょ。」

私も笑う。

二人で笑う。

私たちの笑い声が、秋晴れの空に、響き合う。
楽しかったよ。

ありがとう。

「…それじゃ、俺はここで…」

ココは、私の家の前。辺りは随分暗くなった。日が落ちるのが早い。

「うん。今日は楽しかった。ありがとう。」

キミはほほ笑んで、

「おう。じゃあ…月曜な。」

「うん。気をつけてね。」

「ああ。」

…キミは帰って行く。

…ねえ、

今日は…羽目を外しても…良いよね…？

「…良平君っ！」

キミを呼び止めた。

振り向くキミ。

「今日はありがとう。」

そう言っただけはキミのほっぺに背伸びした。

そして、私は何もなかったかの様に笑顔で

「また月曜ねっ！」

と言っただけの方へちよつと早足で歩き出した。

多分キミは赤い顔してるだろうな。私だって自分の大胆さにちよつとビククリ。

でもこんな私もいて良いよね。

肝心の所で失敗するキミ。 以外と照れ屋なキミ。

前野良平…私の彼氏。 大好きな人。

キミと初デート（後書き）

9話を書いてからすぐに書いてみました。デートは、二人らしいものになったと思います。

今回は、今のところ真章の事が書きたいので、そんな内容になると思います。

最後になりましたが、感想やメッセージ、アドバイスなど、本当に嬉しい限りです。この場を借りてお礼をいいます。

それではこの辺で。また11話でお会いできる事を祈って…

キミとケンカ

キミとデートした。

予定通りにいかなかったけど、キミと私の距離が、前より近付いた気がする。

ありがとう。

「それで？結局タダ券は使わなかったの？」
少し呆れ気味の亜花莉。

「…うん。…でもお姉さんの彼氏、治ったから始めの予定通り二人で行ったんだって。」

少し決まり悪そうに言う私。

「まあ、いいんじゃない？あんたららしいよ。」

そうやって、亜花莉は私の肩を軽く叩く。

「うん。」

私は照れる。

話題を変えよう。

「ところで、亜花莉と田辺君は？最近どう？」

いつもの軽いノリで聞いたのに、亜花莉の顔が強張った。

「…今私ら…ケンカ中なんだよね…」

困った様な顔をする亜花莉。

「ケンカ？！どうして？」

私は驚く。

亜花莉と田辺君は有名な長持ち&ラブラブカップルで、中学生の頃から付き合っている。

私は田辺君と付き合う前から亜花莉と友達だけど、今まで一度もケンカの話なんて聞いた事がない。

「倦怠期ってヤツ？なんかお互いギクシャクしちゃって…」

「…倦怠期…」

「付き合いが長いと必ずあるのよ。逆に今まで無かったのが不思議なくらいよ。」

「…そうなのかなあ…」

私はうつむく。

倦怠期…キミと私にも…起こる日が来るのかな…

「でもさ、別れる訳じゃないんでしょ？」

私は少し必死な顔で聞いた。

「どうかな…」

遠い目をする亜花莉。

「…っていうかいつからなのよ？倦怠期って…」

「あんたらがたこ焼き食ってる頃。」

「土曜日に？」

「そう。電話してたら…」

「電話…」

「始めはいつもの調子だったの。でも…だんだんお互い口調が厳しくなってる…」

「なんの話題？」

「…部活。」

「部活？サッカー？」

田辺君はサッカー部に入っている。3年が引退してからはキャプテンをしている。

「そう…なんか最近、1年と上手いかないらしくて…疲れてるみたいからだから『たまには気を抜いたら？』って言ったのよ。」

「うん。別に問題は…」

「でも、それがいけなかったみたいで『今は大事な時だから気なんか抜いてられるか！』って怒りだして…」

「それで？」

「こつちも心配して言ったのにそんな言われ方されたら腹立って『あんたがピリピリしてるからみんなついて来ないんじゃないの？』って言っちゃったのよ…」

「あーあ…」

「それで電話は終了。メールも電話もないの。」

「…そうなんだ…」

私はふと田辺君を見た。

先週私に笑いかけた田辺君じゃなく、イライラした表情。

キミが様子を伺う様に話をしている。

でも、田辺君は頷く程度で会話らしい会話は見られない。

「私…いけない事…言ったのかな…」

しゅんと肩を落とす亜花莉。

「きつと、田辺君は神経質になってるだけだよ。地区予選近いつて良平君も言ってたし…」

「…はあ…」

深い溜め息をつく亜花莉。

こんなに着ち込む亜花莉は見た事ないかもしれない。

いつも太陽みたいに明るくて元気な女の子…それが亜花莉…

「それは北里がまずかったかもな。」

帰り道、キミと並んでいる。

最近の私たちはこうしているのが普通。

私はキミの部活が終わるまで待っていて、一緒に帰っている。

「そう…なのかな…確かに言い過ぎだとは思っけど…」

「真章さ、最近後輩と仲悪いんだ。1年、自己主張が強い奴等ばかりなんだって。」

「…そっか…田辺君、キャプテンだもんね…」

キャプテンという重圧…そんな時は彼女との電話にも神経質になるのかな…

「そう。チームがそんな時でもアイツなりに頑張ってるんだよ。」

「…でも…だから力抜いたらっていうのは良いんじゃない？」

「それじゃあさ、」

キミは私を振り返って真剣な顔になる。

「自分は死ぬほど頑張って気をはりつめてるのに、簡単に”気を抜いたら？”とか言われたら、優梨はどう思う？」

「それは…」

きつと怒る。

そうか…田辺君は亜花莉にやつあたりしちゃったんだね…

でも…

「でもさ、それって分かりにくいよ…」

「まあな。男つてのはそんなもんだよ。みんな無器用なんだ。」

「…うん…そうだね。良平君ってその典型的なカンジだもんね。」

「え、っ…なんだよそれ！」

キミはギョツとした顔。

「べえっにつ。あ、家に着いちゃった…」

…なんだ…早いのに…

「…それじゃあ…な。」

「うん。送ってくれてありがとう。」

そう言くと、キミは微笑んで帰っていく。

…男の子って…意外と複雑なんだな…

ちよつとだけ、キミが分からなくなった気がした。

次の日、亜花莉は、まだ田辺君と仲直りしていないようだった。

「なんかさ、お互いギクシャクしたままなんだよね。」

亜花莉は苦笑する。

「真章に、話しかけられないのよ。そういう雰囲気になっちゃって

…」

「そっか…」

うつむく私達。なんて声をかけて良いの？

「でもさ、なんか拍子抜けしてるんだ…」

「えっ？」

「ケンカする前はいつも一緒にいたんだよ。でも今はそれがウソみたい…そんなものだったのだった。」

「…それは違うんじゃない？」

「えっ…」

突然の私の言葉にとまどう様子の亜花莉。

「田辺君ってさ、大人っぽいけど意外と頑固なんだよ。だから自分の方から謝るのが苦手なんだよ、きつと。」

「…そうなのかな…」

「うん。だから本心では寂しいと思ってるんじゃない？」

「…そうか…そうだね…。ありがとう。」

亜花莉が、私に微笑む。

いつもの亜花莉の笑顔。

なんだか私まで嬉しくなる、笑顔。

放課後、いつものように体育館の二階にある観客席に座ってキミを見る。

わたし「キミの彼女という事は、なんとなく広まって、私が体育館にいることもいつもの光景になっていた。

そんな時、不意に声を掛けられた。

「あなた、有沢優梨さんよね？」

声の主はバスケ部の女子マネ・坂下麗先輩だった。

彼女は学校でも1、2を争う美女で、男女共にファンが多い。

「…はい、そうです。」

「…隣、座るわね。」

「あ、はい。」

そう言つと先輩は私の隣へ腰を下ろした。

隣に座つた先輩は、こっちを見ないでバスケ部の練習を眺めている。

すらつとして背が高い先輩。でも横顔もすごく絵になる。

「あなた、良平の彼女なんですって？」

『良平』…呼び捨て？

「…そうですけど…それが何か？」

少し怪訝そうに返す。

「あ、呼び捨て、気にしてるの？ウチの部って男女関係無く呼び捨て

てで呼んでるだけだから気にしないで。」

明るく笑顔で返す先輩。…よまれてた…。

「別に…それより何か？」

「別に大した事じゃないけど、ただ、気になってね。」

気になる？何を？

「良平、前から言ってたのよねえ。好きな女の子がいるって。」

「…そうなんですか。」

本当にそれだけ？興味本意？

「ただね、意外と普通の子だなあって。」

…カチンときた。『普通の子』…別に事実だから良いけど…本人の前で言う？

「…どんな子だと思ってたんですか？」

「そうね…少なくとも私より綺麗で届かない様な子だと思ってた。」

「…すいません…」

本心じゃなかったけどなぜか謝った。

「謝る事じゃないわ。でも、本当に意外だったのよ。」

その時、ピッーと笛の合図が聞こえる。

「コーチの声らしきものが『15分休憩！』と叫ぶ。

「あ、それじゃ、私行くわね。」

先輩は立ち上がって私を振り返る。

そして、すれちがいざまに私にだけ聞こえる声でこう囁いた。

「良平ね、1年の頃、私に告白してきたことあるのよ。」

えっ？

私は急いで振り返った。でも、そこに坂下先輩はもう居なかった。

ただ、一人になりたかった。

キミを見ていることが辛くなった。

キミは、坂下先輩に告白したの？

私が初恋の相手ではなかったんだね。

そつえば初デートの時、『女の子とデートするのは初めて』と言ってたね。

デートは初めてでも、初めて好きになった人は私じゃなかったんだ。

デートが初めてなら、きっと私が全部キミにとっての初めてだと思ってた。思い込んでた。

そんな自分が情けなくて…恥ずかしくて…気付いたら体育館を抜け出していた。

何気無く歩いていたら、また校舎裏に来ていた。

紅葉は葉を落とし、枝が丸見えだった。

どこか寂しそう。

はあ…と溜め息ひとつ。

「有沢？有沢じゃない？」

紅葉の木の裏側から現れたのは…

「田辺君！」

「どうしたの？良平、もう練習終わったの？」

「…うん。ちょっと…。それより田辺君こそ！どうしたの？」

「…サボった。」

「えっ…?!」

田辺君は、どんなに辛い練習でも、1回も休んだことは無かった。少なくとも、亜花莉はそう言ってた。

「なん…で？」

「…俺さ、キャプテンなんて失格なんだよ。」

そう言って、田辺君はドサツとその場に座り込む。

つられて私も隣に座る。

「1年にさ、困った奴が居るんだよ。そいつさ、自分の思い通りにならないと気が済まない奴で…」

多分、キミが話してた1年だね。

「そいつがさ、この前のレギュラー試験落ちたんだ。ま、正確には、こつちが選考したから落ちただけ…。それが先週の金曜。」

亜花莉とケンカする前の日…

「したらさ、そいつ文句言い出したんだ。『自分より下手な奴が選ばれてるのに、自分が落ちるのは府に落ちない』って。」

「…すごい自信…。」

「俺、そいつに言ったんだ。『確かに前前の技術は認めるが、サッカーはチームプレイだから、協調性のある奴を重視したんだ』って。」

「…そしたら？」

「辞めた。部活。」

「…そうか…でも、正しいこと言ってるじゃない。なんでキャプテン失格なの？」

「そいつさ、友達5人と入部したんだ。その中の3人はレギュラーだった。」

「…それで？」

「そいつら含めて6人全員辞めた。その上練習中に接触事故があったて2人怪我。部員が足りなくなつて、大会に出られなくなった。」

それを言つと、田辺君はがっくりとうなだれた。

「ただでさえ部員不足で困つてたのに8人もいないと出場は無理。これまでやってた事も水の泡。」

田辺君は溜め息をついて、

「チームプレイが重要とか言つてて、俺が1番できてなきゃ、キャプテン失格だろ？なんか悔しくて…」

「…それで部活サボつたの？」

「まあね。きつと誰も来てないし。」

「えっ…」

「試合に出られないの分かつたの今日だからさ…、どっちにしても今日は練習無しにする予定だったし。」

「そっか…」

しばらく沈黙。

その沈黙を破つたのは田辺君だった。

「亜花莉、元気？」

「うん…ねえ、仲直りしないの？」

「仲直り？」

「うん…。亜花莉、寂しそうだっただよ。田辺君も寂しいんじゃない？」

「…寂しいよ。でも、こんな俺、カッコ悪すぎて見せらんないよ。」

「なんで？」

私は聞き返す。

「どうしてカッコ悪いところ見せられないの？」

「どうしてって…」

「私が彼女なら、全部見せてほしいけど？」

「なんでだよ。逆ギレしてんだぞ。部員にも愛想つかされたんだぞ。そんな姿見るのなんて絶対嫌だろ。ましてやそれが自分の彼氏だったら…」

「うっん。」

私は田辺君に向き直る。

「私なら、カッコよくしてばっかりよりも、弱いところを見せてくれる方が嬉しい。」

「…なんで？」

「だって、カッコよくしてるって事は、自分を作ってるんでしょ？それよりも、素の…飾らない姿を見せてもらえた方が良い。」

田辺君はこっちをじっと見ている。

「作ってるのは疲れるでしょ？恋人の前ぐらいなら、そのままいてもらいたい。弱音吐いたって、へこんだところだって、私の前でだけでも見せてほしい…そう思うのはおかしいかな？」

「しばらく沈黙。」

田辺君を見る。

私の言葉を、ひとつひとつ整理しているような顔。

そして、自分の中で結論を出したのか、こっちを向いた。

「有沢って、良いこというなあ。」

そう良いながらポンっと頭に手を置く。

…良平君みたい…

「そ…そうかな。」

「うん。良い奴。良平は幸せ者だな。」

「でも、亜花莉が彼女で田辺君も幸せでしょ？」

「うん。ホントだな。」

そう言つて田辺君は微笑む。

私も笑う。

「ところでさ、有沢はどうしたの？良平は？」

私は言葉に詰まる。

「…田辺君、坂下麗先輩つて知ってる？」

「ああ、バスケット部の女子マネだろ。」

「…他に…何か知らない？」

「どうした？なんかあったのか？」

「さつきその人に話しかけられたの。それで、去り際に”私は去年、

良平に告白された”つて…」

「ああ…その事…」

「その事つて、やっぱり知ってるの？」

「うん…その頃はあんまり仲が良かった訳じゃないから詳しくは分からないけど。」

「じゃあ、ホントなの？」

「噂じゃな。坂下先輩のファン、多いからなあ…俺は亜花莉が居るから興味なかったけど。」

「…そうなんだ。」

「でも、わざわざ言いわなくても良いじゃんなあ。自分から振ったんだろ。」

「そうみたいなんだけど…」

「あのテの女はプライド高そうだから、変に對抗意識持つんだよ。」

「…そうなのかな。」

「そうだって。今良平が好きで、彼女なのは有沢だろ。もっと自信持てって。」

「うん…。ただね、そのひと”良平”って呼んでたの。呼び捨てで。」

「ほう…。」

「なんか悔しいっていうか…どっちが彼女か分からないっていうか。」

「んじゃ、呼び捨てにしてみたら？」

「…えっ？」

「そうしたら解決するんじゃない？」

「…そう…でもないかな。」

「そうか…。」

「でも、思い込んでたんだ。良平君の初めて好きになった人は私で、私の初恋が実のつたみたいに、良平君も初恋だったって…ちゃんと聞きもしないで…自分勝手だよな。」

「そうかなあ？」

田辺君が、口を挟む。

「俺、別にそうは思わないよ。むしろ良いことじゃない？」

「そうなの？」

「だってさ、つまりはヤキモチ焼いてんだろ。坂下さんに。」

「…多分…。」

「あのさ、」

田辺君は少し遠くを見るような感じで続けた。

「恋すると、みんな自己チューになっちゃう訳よ。だろ？相手が一番大事なんだもん。だから自分を見てほしいとか、好きでいてほしくて無意識に良い方に考えちゃうんだよなあ。」

「…田辺君もそう…？」

「ああ、まあ俺が言っても説得力無いけど。」

小さく笑う田辺君。

「だから坂下さんを意識して、ヤキモチ焼いたんじゃない？」

「…そうだね。」

「つていうかさ、一番分かりやすいのが良平だつて。」
「良平君？」

「ああ。絶対有沢しか見えてないぜ、アイツ。」

「…そう？」

「誰が見ても一目瞭然！」

「そ。だから、自分勝手に構わないよ。むしろ有沢はもっと自己チ
ューになるべし。」

「ふふふ。そっか。」

恋は盲目って事かな？

「ありがとう。なんかそう言われたらスッキリした。」

「そう？それはどうも。光荣だよ。」

「ふふふ。亜花莉と仲直りするでしょ？」

「ああ。とりあえず今日電話してみるよ。」

「よしよし。その調子。」

「ははっ。頑張るよ。ありがとうな。」

「いえいえ。」

お互いクスツと笑う。

これで亜花莉も元気になるね。

そんな事を考えていたら、田辺君が唐突に聞いた。

「ところでさ、なんで有沢は俺の事、”田辺君”なの？」

「えっ…」

そんな事、考えたこと無かった。

「何でって…なんでだろう。田辺君も”有沢”じゃん…」

「そうだな。でもなんかそれで成り立ってるよな。」

「そうだね。これで使い分けてるし。」

「このままがいいね。」

「だな。」

私たちはまた笑いあった。

「それじゃあ、この辺で。行くんだろ。」

「うん。体育館に行ってみるよ。まだ練習終ってないかもしれない。」

「分かった。気を付けろよ。」

「うん。また明日ね。」

こうして田辺君と分かれた。

「まだいるかな…」

体育館に足早に行った。

でも、練習はすでに終わったみたいで、誰も居なかった。
とぼとぼと帰る。

校門のそばに行く。

人影が見える。

近くに行かなくても分かった。

キミだ。

「優梨…！」

「良平君…。」

キミが駆け寄ってきた。

「帰り、いつもの場所に居なかったから…」

「ごめん…」

「もう少し待つて来なかったら帰るつもりだった…いくか。」

「うん…ホントにごめんね。」

いつもの様に歩き出す。

でも、キミはどこかおかしい。

いつもはキミの方から聞かなくても話しかけてくれるのに…。

空気が重い。

いつもの私たちではなくなっていた。

そして、その沈黙を破ったのもキミだった。

「何してたの？今まで。」

「何って？」

「いや…」

何か言いたそうなキミ。

「どうして？なんかあった？」

「言えないような事なのか…？」

「別に、そんなんじゃないよ。」

「なら言えるだろ。」

おかしい。いつもの良平君じゃない。

「どうしてそんな聞き方するの？」

「…男と居たって、本当か？」

「えっ…。」

思いがけない言葉に足をとめた。

何で知ってるの？

「ホントなのか。」

溜め息混じりに言うキミ。

「誰から聞いたの？」

「麗さん。知ってるだろ？女子マネの。」

”麗さん”…。

キミの口から出てきた言葉に驚く。

「誰と居たんだ？」

口調が厳しくなるキミ。

「田辺君。」

「真章？！どうして？」

「たまたま見掛けて二人で話してた。」

「なんで？何を？俺と帰ることより大事な事だったのか？」

「お互い悩みを話し合ってたの。別に良平君が心配してることはないよ。」

無意識に冷たく言い放った。

その態度が気に入らなかったのか、キミは怒って言う。

「何だよ。何で悩みを打ち明けるのが俺じゃなくてアイツなんだ？」

「だからたまたまだってば！それより、何で坂下さんが知ってるの？」

「知らないけど、練習終わったあと、耳打ちされた。」彼女、校舎裏で男というよ”って。」

信じられない…。

あの人はあの後私をでつけてたんだ。

なんで…。

「なんで坂下さんの事、信じたの？」

「信じるよ。あの人はウソとか冗談とか言わねえし。」

「やけに信用してるんだ…。」

やだ…。私、なんでこういう言い方しか出来ないの？

「その言い方はないだろ。実際真実だったんだし。」

「そうだけど…でもやましい事とか言えないことを話してた訳じゃないよ。」

「なら、何言つてたんだよ。」

「…。」

私はうつ向く。

キミの事。

キミの事を話してたんだよ。

なのに言えない。

すぐくもどかしい。

「ほら、言えないじゃん。麗さんの言ったとおりじゃん。」

「なによ…さつきから麗さん麗さんって！坂下さんは信用して、私は信じられないの？」

「だって、矛盾してるじゃん。何にもないなら言えるだろ。」

「だから、何にもないってば！」

「だからそれなら言えってば！」

お互い口調がきつくなる。

いつも私を気づかい、優しく話しかけるキミではない。

そんな状態にうんざりしたように言った。

「田辺くんとはね、サッカー部の事を話したの。それから亜花莉とのこと…それと、良平君のこと！」

「…俺？」

不意をつかれたようなキミ。

「そうよ。良平君が坂下さんに告白したって話をしたの。ちょっとショックだったけど、話してたら落ち着いたの。それだけ！」

「なんだよそれ…何で…」

「さあ？相談すれば良いじゃない！麗さんに！私じゃ信用できないんでしょ！」

「そうじゃなくて…」

「何？」

「何でお前がその事知ってるんだって聞いているんだよ。」

「さあね。張本人に聞きなさいよ。」

「誰だよ…もしかして麗さんか？」

「知らない！もう知らない！」

私は逃げるようにその場を去る。

みつともない。

カッコ悪い。

最悪！

遠くで、”優梨…”という声が聞こえた。

でも、無視した。

みじめだ。

あまりにもワガママだ。

胸が苦しい。

言葉にできないもどかしさが込みあげてくる。

声を出して泣きたかった。

私はひどい。

きちんと説明もしないで…一人で怒って…。

坂下さんの名前を聞きたくなかった。

そして、坂下さんを信じ、名前を口にしたたキミがたまらなく嫌だった。

いや…。

私は足を止める。

もしかして、キミを…坂下さんを嫌う口実にした？

「最低だ…私…。」

ふと空を見上げる。

もう真っ暗だ。

キミは毎日…こんなに遅くまで部活をやっている。

それなのに、反対方向の私を家まで送り届けてくれる。

どんなに断つても…無理矢理でも送ってくれた。

私は私が嫌だ。

キミの優しさも、心配する気持も気付けなかった私が…

涙が溢れた。

止めようとする程、涙は止まらない。

止まらない涙が頬を伝う。

この涙はなんの涙？

次から次へと流れる涙の意味を自分に問いかける。

家に着いた私は、真っ先に自分の部屋のベットへ倒れ込む。

枕に顔を埋めて、火がついたように泣き出した。

ごめんね。ごめんね。こんな私で。

こんな子供みたいな…幼稚な私でごめんね。

怒って、怒鳴ることしかできなくて…

心なかで何度もキミに謝った。

しばらく泣いて、泣き疲れた私は仰向けになった。

目は腫れぼったい。

顔がヒリヒリする。

頭がボーッする。

ふと、ある事が頭をよ切った。

無意識に声に出していた。

「明日…どんな顔して会えば良いんだろう…。」

もう、キミの顔が見れない。

キミとケンカ（後書き）

お待たせしました。11話です。前回からかなり経ってしまいました（汗）

話はシリアスで、次回に続きますが…どうなるのか私にも分かりません（苦笑）後編をお楽しみに！

最後に、毎回言っておりますが、メッセージやアドバイス本当にありがとうございます！今後も応援してやって下さい。それでは、12話でお会いしましょう！

キミとわたしとおかあさん

キミとケンカした。

初めて見た、キミの怒った顔…まだ私の頭と心に残っている。

ごめんなさい。こんな私で。

ごめんなさい。こんな彼女で…。

キミに会いたくない…というより、会えなかった。どんな顔すればいいか分からないから。

だから私は、次の日、学校を休んだ。

ウチの親は一人っ子の私に甘い。私が休みたいとか体調が悪いと言えば、必ず休ませる。

私はベッドの上に横になっていた。いつもならとくに学校に行く時間だ。

ごめんね、良平くん。ズルイ私で。

ごめんね、お母さん。ズル休みして…。

悪いとか、いけないとか、分かっているけれど、私にはこうするか出来なかった。キミから…逃げることしか。

私は目を閉じた。眠るつもりも、眠れるはずもなかったが、朝食を取る気もなかった。

今日は何の授業だったっけ…。

国語…確かキミが当たる番だったはず。

この前の授業の最後に『次の時間答え教えて』と言ってたね。…大丈夫かな。

体育…最近は男子はバスケだから人一倍楽しんでやってるね。

キミ程カッコよくシュートを決められる人なんていないよ。

数学…キミは一番得意な数学の時間は、真剣になるね。私に教えてくれる程に。

…どの授業の時も、独りでに目はキミを追っていた。

こんなに好きなら…キミの事しか考えられないなら…なんでケンカなんてしたんだろう。

昨日から続いている後悔に、また今朝も涙を流した。

そのとき、勉強机の上の携帯が鳴った。

ウチの親は過保護なので、家から少しでも離れた高校に行くことが決まったら、無理矢理携帯を持たせた。だから私も人並みに持っていた。

多分あの着メロは亜花莉だ。

事前に知らせていなかったから、メールを送ってきたのだろう。

わたしはベッドからゆっくりとダルそうに体を起こし、携帯を手にとった。

やはり亜花莉からのメールだった。

『今日は休み？私、昨日真章と仲直りした。真章が優梨にお礼言っ
とけって言ってるけど、何かしてくれたの？』

とあった。そうか…仲直りしたんだ。良かった。

今まで塞ぎ込んでいた気持ちが少し軽くなっていくのを感じた。そして、メールに返信する。

『仲直りしたんだ。良かった。昨日田辺くんと少し話したんだ。もしそれがキツカケで仲直りしたなら嬉しい！今日は少し体調良くな
いから休む。悪いけどテスト近いから、今日の分のノート見せてね。』

私は送信ボタンを押した。私は携帯を枕元に置き、またベッドへ横になった。

心配事の1つは解決したが、一番解決したいことがまだできていない。キミとの事だ。

キミはどうしているだろう。

私の顔を見なくて済んだことにホッとしているの？それとも私が臆病者だと呆れた？

どっちにせよ、私にとって悲しいのは変わらない。気まずい雰囲気
が立ち込めるだけ…。

そもそも、どうして私は怒ったの？坂下さんの事だよね？

良平くんの彼女は私だし、彼女は良平くんと何かあったわけでもない。…坂下さんは悪くない…。でも…。

私は自分が悲しかったんだ…。

同じクラスで、恋人同士でも…私には知らない事が多すぎる。

でも坂下さんは違う。バスケット部のマネージャーで、1年の頃からのキミを知ってる。

そしてなにより…キミに告白された。

その後付き合ったのかどうかは分からないけど、告白という事実が、私を苦しめているのは確かだ。

私は寝返りをうつ。部屋の白い壁をぼんやり眺めた。

…キミに会いたい。

…でも、会えない。

窓の向こうから小鳥の鳴き声がする。

空は青く、澄みきっている。

…私は一人、キミを思って…泣く。キミは私を思ってくれているのかな？

…そんな事を考えていると、うとうととしてきた。

昨日の夜は、泣いては少し眠るの繰り返しで、きちんと寝ていない。腫れぼったいまぶたが重い。そして、私は瞳を閉じた。

…携帯の着メロが鳴る。

…どれくらい寝てたろう…。

私は着メロの鳴り終わった携帯を見る。

…3時間は寝た…。携帯に起こされなければ多分もつと寝てただろう。

見てみると、メールが2通来ていた。一人は亜花莉。そのメールには、

『ノート、了解！それより、あんたち、2人そろって休むなんて、どうしたのよ。』
とあった。

… あんたたち2人？それは、私と誰？

私は目が覚め、急いで短くメールに返信した。

『休んだって、私と誰？』

そう打って、送信する。今は昼休みの時間だからすぐに返事が来るだろう。

そういえば、さっき来たメールで2通のうち1通は見えていなかった。受信ボックスを見る。未登録のアドレスだ。

そのメールの件名には…

『良平。』とあった。

キミからだ。

本文には、

『今日休んだんだろ。でも、仮病だろ。俺、放課後に行くから。』とあった。

何がなんだか分からないしていると、亜花莉から返事が来た。

『あんたらって言ったら、前野しかいないでしょ』

とあった。

… どういう事？

私はキミに、携帯の番号しか教えていない。

メルアドは今度教えてもらおう… と思っていたから…。

それなのに、キミからメールが来た。

放課後にウチに来るといふ。

… でも、キミは今日休んでいる…。ダメだ。話が繋がらない。

私は亜花莉に返信する事にした。

『本当に休み？あと、良平君に私のメルアド教えた？』

メールを送る。

もう一度受信ボックスを見る。

アドレスを見た。

『basuke.love@…』

… 良平君っぽい。

でも、単純すぎない？

私はとにかくそのアドレスにメールを送ってみることにした。

『本当に良平君？放課後にウチに来るの？でも、今日休んでいるんじゃない？』

…送信。

パタンと携帯を閉じてわたしは小さくため息をついた。

もし、あのメールが本当に良平君がくれたものだとして、本当に私の家に来るなら…なんて顔すれば良いの？

亜花莉からメールが来る。

『アド、教えてないよ。どうして？なんかあった？』

…ますます分からない。

でも亜花莉に心配をかけたくなかったので返事のメールは、

『ごめん。なんでもない。勘違いみたい。気にしないで』と送信した。

キミはどうしたいんだう…私とキミとの事。

ベットの上で、膝を抱え込むように座る。

仲直りはしたい。でも、その方法が見当たらない…。

携帯が鳴る。

キミからだ。

『アドレスは真章から聞いた。学校は休んでる。…これから行っても良いか？』

…えっ…。えっと…。

どうしよう…。

ウチにはお母さんがいたはず…。休んでるのに彼氏が来たら変に思うかもしれない…。

でも、それは表面的な理由だ。心の中では…キミに会いたがっている。

『そうか、分かった。家に来てもいいけどお母さんいるよ？私は会いたい。』

送信。…今の気持に素直になった。キミに、会いたい。

返事はスグに来た。

『じゃあ、理由をつけて、出てこれない？優梨が好きな秘密の場所に。』

秘密の場所…初デートの時にキミとタコ焼きを食べた、あの丘の上…。

『分かった。やってみる。行けそうならメールする。』

携帯を閉じる。そして、同時に私は決意した。

「あら、優梨！起きてきても大丈夫？」

私が下へ降りると、その姿をとらえた母親が、心配そうに尋ねてきた。

私はそんな母親になるべく元気そうに言う。

「大丈夫。それより…ちよつと出かけても良い？」

みるみるうちに、母親の表情は怪訝そうになる。

「どうして？どこに行くの？」

「薬局に…薬買いに行こうかなって…。」

すると母親は元の顔に戻り、

「あら、それなら私が買いに行くわよ。薬屋さん、遠いじゃない。

学校休むような人が行く距離じゃないわよ。」

「…そうだね…。じゃあ、頼んでも良い？」

「モチロン。お昼ごはんをそろそろ作るから、食べ終わったら買いに行くわ。」

昼からか…。しょうがない。

「分かった。じゃあ、お昼は食べるから、出来たら教えて。」

「はいはい。部屋で寝てるのよ。」

「うん。」

…私は部屋に帰った。そして、キミに結果を報告。

『ゴメン、家からは出られなかった…でも、昼からお母さん居なくなるから、その時にウチに来て。』

キミはどう思うだろう…。

私は少し残念だった。

前から大好きな、あの丘の上で話をすれば…素直になれたかもしれ

ない。謝れたかもしれない。

でも、そんなの言い訳。ドコだろうと、ようは気持の問題だよ。

私は、逃げてばかりいた。

でも、それがとても疲れることで、キミにも失礼だって分かったの。だからもう…逃げない。

…さっき、母親を説得しようと決心したときに、そう思った。携帯が鳴る。キミから。

『分かった。なら、お母さんが居なくなる頃教えて。』

私はこう打った。

『うん。待ってる。』
って。

昼ごはんを食べて一段落した頃、お母さんは薬屋へ行った。

薬屋は私の家からかなり離れた所にあるので、往復すると平気で2時間はかかる。

それにお母さんは夕飯の買い出しにも行くと言っていたので、帰りはもっと遅くなるはずだ。

私はお母さんが居なくなるとすぐにメールを打った。

『今、お母さんが出かけたから、来ても大丈夫だよ。』

…なんか、お母さんに悪かったな…。

ズル休みをした上に、わざわざ遠くまで薬を買いに行かせてしまった。薬なんて要らないのに…。

でも、たまには嘘をつくのもしょうがないかもしれない。

私はずっと、良い子でいた。

今まで両親を心配させたり、困らせたりしたことがなかった。離れた高校へ行くこと以外は…。

そんなことをぼんやり考えていると、玄関のチャイムが鳴った。

キミだろうか…。でも、早すぎない？メールを送ったのは5分ちよつと前。

キミと私の家は、正反対の位置にあるはずなのに…。

違う人かもしれないと思いながらも、私は玄関へ向かった。

ガチャツとドアを開けた。キミが立っている。

キミは怒っているようにもしよげているようにも取れる顔をしている。
た。

「良平君…いらつしやい…。」

「うん…。」

どこか気まずい雰囲気。

「とりあえず、あがつて。」

この空気が耐えきれなくなり、私は笑顔で言った。

「うん。お邪魔します…。」

キミは私の家に入る。確か、今日が初めてだよね。

私の部屋へ案内して、私はベッドの上、キミは床の座布団の上にそれぞれ座った。

少しの沈黙。

それを破ったのも、やはり私だった。

「今日、学校休んだんだね…。どうして?」

「…多分、優梨と同じ理由だよ。」

「そっか…。」

ダメだ…。会話にならない。

わたしはうつ向く。

話題を探す。いつも意識しないで話していたことが、今は凄いいこと
の様に感じてしまう。

その時、キミの声がした。

「なあ、俺が来た理由分かるよな?」

「えっ…。」

思い当たる事は沢山ある。

田辺くんの事、坂下さんの事…そしてケンカの事、仲直りの事…。

「分かる?」

「何となく…。」

「なあ、なんで昨日、あんなに怒ったんだ?」

やっぱり…昨日の事だよね。

「真章と何かあったのか？2人で何してたんだよ。」

「だから、亜花莉との話を聞いたり、私は良平君との事を話したり…。」

「何で優梨があいつらの話を聞くんだ？どうして真章に俺たちの話をする？」

「どうして？お互いの相手の話をすることがそんなにいけないの？」

「なんで話す相手がそれぞれの相手じゃないんだよ？お互いの相手の事なら、本人ときちんと話すべきだよ。」

「なんで？なんで今日のキミはこんなに頑固なの？」

「相手に直接言えないこととか、グチとかってあるじゃない。それを言うのもダメ？」

「それならなおさらじゃないか。俺に言いたいことがあるなら、真章じゃなくて俺に言えよ。」

「…そんな言い方しなくても良いじゃん。」

「じゃあ、言わせてもらっけど、」

私は立ち上がり、キミの隣に勢い良く座って、キミを見た。

「良平君、坂下さんの言うことは信じられるのに、私の言うことは信じられないじゃない。」

「坂下さんって…麗さんか？なんで優梨がそんな事を気にするんだよ。」

「良平君、私が何も知らないと思ってるかもしれないけど…知ってるんだから！良平君が坂下さんに告白したことあるって！」

「言っちゃった…。これじゃあ、ヤキモチ妬いてるのバレバレじゃん。」

「なんで…。」

「本人が言ったの。昨日…私に。私は普通の子で驚いたって。良平君は自分に告白したことあるって。」

「それは…。」

キミは何かを言いかけたけど、私は続けた。

「私が彼女って知ってるのに…私の前で良平って呼ぶんだよ。そり

やあ私は坂下さんより綺麗じゃないし、手の届かない様な女の子じゃないわよ。でも…良平君の彼女は私でしょ？なのに…良平君は私よりも坂下さんの方を信用してる。それが…すごく嫌。」

言ってしまった。見せてしまった。私の醜い…本心を。

「それ、言いたいこと全部？全部本当のことか？」

「…そう。」

急に恥ずかしくなった。キミから目をそらす。

「優梨…それだけを聞いてると…何というか…麗さんにヤキモチ妬いてるみたいに聞こえる…。後、勘違いしてる。」

「えっ…。」

勘違い？どの辺が？勘違いもなにも、全部坂下さん本人から聞いたこと。

そして…私を感じたこと。そのどこが違っているんだろう。

「あのな、麗さんには確かに告白したよ。でも…あれはゲームだったんだ。」

「ゲーム？」

「そう。俺、バスケ部の仲間とシュートのゲームしててさ…それで負けた奴は勝った奴の言うこと聞くんだ。」

「それで？負けたの？」

「うん…それで、罰ゲームとして、麗さんに告白することになって

…」

「でも…ふったんでしょ？坂下さんは。」

「いや、あの人はOKしたんだよ。だから…俺、焦って…急いで謝ったんだ。」

「そうしたら？」

「あの人、態度が急に変わった。俺のこと、散々否定した。それで部活とか用がないときは完全無視になった。」

「…でも…怒ってもしょうがないよ。ゲームで告白されたなんて、誰だって傷付く。」

「ああ…だから俺もしょうがないなって思った。でも…」

キミは私を見た。

「優梨にそんな事言ったなんて、許せない。俺に怒ってるだけなら良いけど、それと優梨とは全く関係ない。」

「でも…良平君は坂下さんの事麗さんって呼んでるじゃん。」

「それは部の方針なんだ…それをいうなら後輩の女の子も俺のこと呼び捨てだぞ。」

「うん…。」

「嫌？」

「…ちよつと。…でも…大丈夫。」

「…ごめん。でも…俺、何とも思ってないよ。」

「分かってる。」

「…それに…俺も優梨の事、怒れないや…。」

「えっ…？どういうこと？」

「優梨、麗さんにヤキモチ妬いてたろ。」

「…うん…。」

「俺もヤキモチ妬いてた。」

「えっ…。誰に？」

「真章。」

「どうして田辺くん？」

「俺、優梨が俺たちのことを俺とじゃなくて、真章と話してた事が…許せなかった。」

「…良平君…。」

「そっか…私が嫌だった様に、キミも嫌だったんだね。」

「俺、別に麗さんの方ばかりを信じてる訳じゃないんだ。優梨が…男と居るって聞いて…カッとなって…ただそれだけ。」

「キミは寂しそうな顔。大丈夫。嘘じゃないって分かるよ。」

「つまりはさ、私たち、どっちもヤキモチ妬いてたって訳？」

「まあ…つまりは。」

「…じゃあ…お互い様って事で…仲直りしよう。…私が一人で怒ってたんだけど…。」

「うつん…。俺のせいでもあるよ。ごめん。悪かった。これからは、優梨の事、もつと大切にする。」

「私も…良い彼女になれるように頑張る。」

「おうつ。んじゃさ、とりあえずケンカは終了ということ…。」

「はいはい。…これからもヨロシクね。」

「なに？改まって。俺もヨロシク。」

キミは優しく微笑む。あ、やっとキミの笑顔が見れた…。心が…あつたかくなる。

「ふふふ。」

私は少し思いだし笑い。

「えっ？なに？何がおかしいの？」

「思いだし笑い。」

「…なんの？」

「だって、良平君のメルアド…『バスケラブ』なんだもん。」

「しょうがないだろ。他に思いつかなかったし…気づいたら周りにも定着したし…。」

「なんか、良平君らしいな。でも…単純すぎて、初めは本当に良平君か疑ってた。」

「なにそれ、ヒドッ。」

キミは大袈裟にショックな顔をしてみせる。

「でもね、」

私は少し笑ってキミを見る。

「私、好きだよ。良平君のそういうところ。」

「…そう？そんな風に言ったのって…優梨が初めてかも。」

「そうなの？」

「だって、他の皆はバカだなあ…ってしか言わねえもん。やっぱり優梨は面白い。」

「…たまには面白い以外の誉め言葉が良いな…。」

「だから、面白い以外の誉め言葉はないの。最上級で類似表現は無し。」

「なにそれ…ヒドイ…」

「んな事無いよ。もつと喜べって。」

「もっ…」

私はほっぺをふくらます。

そして、キミと笑いあう。

やっと戻ってきた…優しい時間。

やっと戻ってきた…優しい声。

心が…優しくなれる。キミのおかげ。

ありがとう。

大好きだよ。

その時、玄関の方からガチャツと音がした。ガサガサとビニール袋の音もする。

「良平君…お母さん帰ってきた…」

「マジ？俺…帰った方が良いかな…」

キミは少し慌てる。

「あ…でも…」

「何？」

私はあることに気づいた。

「クツって…玄関だよねえ？」

「あ…っ…」

固まるキミ。その時、追い打ちをかけるように、部屋へ近づいてくる足音…。

「お母さんが来るよっ！」

「…適当にごまかして…」

キミはすでに諦めモード。

すると、案の定お母さんが入ってきた。

「優梨、お友達来てたの？」

お母さんはかなり怪訝そうな目で、私とキミを交互に見る。

「あのね、お母さん、良平君は今日私が休んだから明日の事、教えに来てくれたの。」

…我ながらありそうな、無さそうなウソ。キビシイかも…。

「明日の連絡ねえ…。それなら携帯でも出来るんじゃない？それに、今日は学校終るの早いわね。」

…最もです。他の言いわけが思い付かない。

すると、キミはお母さんへ正座して向かい、普段はあまりしない、真剣な顔で話した。

「あの…。僕は、前野良平と言います。優梨さんと付き合ってます。」

「

えっ…?!

一同、啞然。お母さんも、予想していなかったせいか、目をパチクリさせている。

「実は、僕ら、昨日ケンカしてしまっただんです。」

「ケンカ…?」

お母さんはなにがなんだか理解しきれていない表情。

「それで、2人共今日はズル休みしてしまっただんです。その上、お母さんの目を盗んで2人で話し合おうと…。」

「ちよつと待つて。」

キミの話を止めたのは、お母さんだった。

「どうして私に隠れて会おうとしてたの?」

「それは…お母さんが気を悪くするかも…と思って…。」

キミはたじろぐ。お母さんは続ける。

「確かに娘の彼氏なんてシヨックよ。でもね、隠れてコソコソ会われるのはもつとシヨックよ。」

「そうなの?」

私が驚いた。

「そうよ。それに、きちんと紹介してくれないと、私に会わせられないような彼氏じゃないかって、不安になるじゃない。」

…そっか…。言われてみればその通り。

「すいませんでした。改めて挨拶します。これから、よろしくお願いします。」

そう言つて、キミはふかぶかと頭を下げた。
するとお母さんが少し笑つて、

「良平君…だっけ？良い人そうで嬉しいわ。優梨の事、こちらこそ
よろしくね。」

と言つた。

「ありがとうございますっ！」

とキミが笑つてこつちを見る。私も微笑む。

「優梨のお母さんつて…良い人だな。」

帰る間にキミは私にこう言つた。

「そう？お母さんも、良平君の事、気に入つてゐたんだよ。」

「そう？なら良かった。んじゃ、ぼちぼち帰るかな…。明日は学校
来るだろ？」

「うん…。良平君も行くよね？」

「おう。じゃ、また明日なっ！」

「うんっ！また明日っ！」

キミは軽やかに自転車をこいで帰つていく。

やっと戻つてきた…。キミに笑顔でまた明日と言える日が。
家に入ると、お母さんに言われた。

「良平君、良い人じゃない。良い彼氏見つけたわね。」
つて。

切なくなつたり、暖かくなれる。

前野良平。キミの名前。素直に笑いあえる、キミの名前。

キミとわたしとおかあさん（後書き）

前回から1ヶ月近く経っての投稿です。遅くなってすみません。

2人は、ようやく仲直りできました。亜花莉と真章も仲直りしました。私も嬉しいです。

次回は新展開を考えているので次も是非見てやって下さい。

メッセージや評価、本当にありがとうございます。励みにして執筆頑張ります！

それではまた13話でお会いしましょう！

オマエとオレ

「おい、前野！」

オレはバスケの監督にいきなり呼び出された。

「はい、なんでしょう？」

息を切らして監督の方へ走っていく。

「前野、お前は背が高いんだからもっと積極的にボールに触れ。それができればお前はもっと強くなれる。」

「…はあ…。」

…訳が分からなかった。わざわざそれを言うために、練習中に呼び出すなんて…。

「あのな、スタメンで使ってた、山川って居ただろ。アイツ、ケガして明後日の練習試合は無理なんだと。そうなるとレギュラーが1人いるんだよね。」

「えっ…監督…それって…。」

「一応、今日のお前の頑張り次第で決めようと思っている。しっかりな。」

そう言つて、監督はオレの肩をポンと軽く叩いた。

「はいっ、頑張りますっ！」

オレは周りが驚くほどに大きな声で返事をした。

「良平、はい、タオル。」

そう言つて、オレの前に白くて細い腕がのびてきた。

振り返ると麗さんがいた。今は休憩中だ。

「…どうも。」

ワザとそっけなく振る舞った。

麗さんは…アイツを傷つけた…。でも、その原因はオレにあった。

「そうだ、この前、彼女見たよ。いつも練習見てるよね。今日は居ないけど。」

「…今日は委員会があるから終るのがちょうどオレと同じくらいな

んです。」

「へえ。そうなんだ。」

麗さんはこつちを見ない。何を言おうか考えている。

「ね、彼女、スキ？」

いきなり近付いてきた。

「好きです。」

「そう。でも彼女、知らないみたいじゃない。私と良平の事。過去にアンタが私にした事。」

麗さんは冷たいまなざしを向ける。

「…麗さん。」

オレは麗さんを見つ直ぐ見る。麗さんは少したじろぐ。

「優梨にはきちんと言いました。オレが麗さんに何をしたか…。」

「それでもあの子、付き合うんだ。」

フツと鼻で笑う麗さん。

「…オレは麗さんに何を言われても返す言葉ありません。オレはアナタを傷つけた。…でも…アイツを…優梨を傷つけることだけはやめてください。かわりにオレに言って下さい。」

「…悔しいのよ。」

「えっ？」

「何で私は罰ゲームの告白で、あの子は本気の告白なの？なんで私じゃなくてあの子なの？」

「麗さん…。」

「…見苦しいわよね。ごめんなさい。もう、あんたたちの事に干渉しないわ。」

麗さんは少し歩いて、立ち止まった。

「あの子と別れたら…許さないわよ。」

小さくて、か細くて、呟くような声だったけど、オレには確かに聞こえた。

オレは笑顔になり、その場で

「はい。」

と小さく言った。

部活の終わったあとのミーティングで、監督から正式に発表があった。
「山川のかわりだが、前野を使う。前野、しっかりな。」

「はいっ！」

周りからは拍手が起こった。オレはただ、アイツに真っ先に聞かせ
てやりたいと思った。

そのアイツを校舎裏で待つ。

すっかり日が落ちるのが早くなった。吐く息が白い。冷たい空気が
頬をさす。

ふともたれかかっている木を見上げる。

紅葉の木…。今は葉がないが、秋口には綺麗な葉っぱをたくさん付
けていたっけ…。

そしてなにより…初めて誰かの前で…泣いた時も…この木の前だっ
た。

そんな事を考えていると、息をはずませてアイツが走ってきた。

「良平君！ごめんっ！遅れちゃった…待った？」

「待った。１０時間ぐらい。」

そう言つて、オレはニヤツと笑った。

「…そ、ごめんね。１０時間も。んじゃ、行こっか。」

アイツもイタズラっぽく笑った。

優梨。オレの彼女。オレが涙を見せた唯一の人でもあった。

オレたちは歩き出した。オレたちは自然と手をつなぐようになった。
優梨の手は意外と大きい。

オレのアネキは多分優梨より小さい。

でも…自分よりも細くて長い指を見ると、やっぱり女の子なんだっ
て感じる。

「もー、委員長なんてやるんじゃないかった！」

「えっと…文化委員だっけ？文化祭は終わったけど、今は何やってる
んだ？」

「特に行事がないから、逆に何か無いかって。それでみんな言いた

い放題。」

そう言っているとアイツは

「困ったもんだ。」

と肩をすくめた。

「そっか…。大変なんだな…。あ、オレ、明後日の練習試合はスタメンで出してもらえることになった！」

オレは今日一番のニュースを伝えた。

「本当に？ スゴいじゃんっ！ 嬉しい！ 良かったねっ！」

優梨は頬を赤らめながら、笑顔で喜んでくれた。

「おうっ！ まだレギュラーの代わりだけど。」

「そうなんだ…。でも、選手は選手じゃん！ 頑張ってね！ 応援に行きたいな…。」

「…でも、遠いぞ。無理して来なくても良いから。」

オレは優梨を見つめて続けた。

「優梨は、来れなくてもずっと応援してて。結果は、真っ先に知らせるから。」

「…うん。分かった。」

ちよつと落ち込んだ優梨。オレはその小さい肩を抱きよせた。

「そんな顔するなよ…。笑ってくれ。」

「良平君…。」

「優梨が笑うとな、オレ、無敵になれるんだよ。だからさ、笑ってくれ。」

手をつないでいるときより、アイツの匂いが近くなる。

あつたかくて、包み込んでくれるような、優しい匂い。

「…うん。分かった。」

優梨はオレの腕からすり抜けて、優しい笑顔で言った。

「頑張ってね！ シュートバンバン決めちゃって、レギュラーになっ
てよ！」

「おう、まかせとけ。あ、優梨の家だろ。もう着いたよ…。」
ちよつと…いや、かなり寂しかった。

もつと一緒に居たい。アイツの笑顔と声で包まれていたい…。

「あ、本当だねえ…残念。また、メールとかして。」

優梨は家の門を開ける。そして、オレの方に近付いて、そっと唇に触れた。

「…またあした。」

暗くてはつきりは分からないが、かすかな月明かりに照らされた優梨の顔は、きつと真つ赤だろう。

オレは微笑んで、

「またあした。」
と言った。

優梨を待つていたときよりも辺りは暗くなり、寒さも増してきた。でも、オレは全く寒くなかった。全身、なんとも言えないぬくもりで満たされている。

オレは家へ帰る。優梨の家とは正反対だ。でも、絶対に帰りは優梨を送って帰る。

心配だ…ということもあるが、何よりアイツとずっと一緒に居たかった。

オレたちはなかなかお互いの時間が合わない。だから、帰りぐらいは一緒に居たい。

アイツはオレと同じ思いらしく、帰りの時間が違っていてもオレが終わるまで待つていてくれる。

ワガママかもしれない。子供なのかもしれない…。

でも、オレはアイツが大好きだ。可愛くて…愛しくてたまらない。ずっと好きだった。初めて見たあの時から…。

『前野君、コレ、落ちたよ。』

少し笑ってオレの手元から落ちた紙を手渡すアイツ。

その紙は国語のテストの解答用紙だった。

『あ…ああ…ありがとう…。』

アイツの手から奪うようにテスト用紙を取りあげる。

確かアイツはクラスの最高点だった。

オレはおそろおそろ聞いた。

『…点数…見たのか…？』

『うん…ごめん…でも、99点なら全然悪くないんじゃないかな…』
と言つて、優梨は不思議そうな顔をして去つて行つた。

99点？いや…そんな事はない…。…もしかして…！

オレは自分の解答用紙を見た。

…66点。…アイツ、逆から見たのか…？6が9だと思つたのか…

？…変なヤツ…。

…これが、オレと優梨との出会いだった。

アイツは覚えてないかもしれない。でも、オレには忘れられない思い出だ。

…ヤバイ…思い出しただけで口元が緩む。…笑つてしまう。

「あー、もう、ダメだな、オレは」

口にだして高ぶる気持を抑える。

オレは走り出した。

このままだとまたアイツに会いたくなつてしまう…。

ダメだ。オレは明後日の事を考えないと…！

寒くて暗い夕方、アイツの家と反対方向にあるオレの家へ、オレは走る。

顔が赤いのは、寒いのと走っているのと…アイツのせいだ。

優梨…好きだよ。

ずっとオレの横で笑っていてくれ。その笑顔で、オレは強くなれるんだから…。

有沢優梨。アイツの名前。居心地がよくて、あったかい、聞いただけで元気になれる、アイツの名前。

オマエとオレ（後書き）

いかがでしたか？今回は良平目線で小説を書いてみました。良平は優梨の事をこんな風に思っているのか？とか、優梨とわかれた後はどうしているのか？とか、少しでも想像して下さいと嬉しいです！
それでは、次は14話でお会いしましょう！また感想等下さい
それでは

キミとわたしのみらい

朝、目が覚めてキミを思う。今何してるのかなって。

夜、寝る前に、またキミを思う。

キミが良い夢を見られますようにって。

そして、オマケでキミの見る良い夢に、私が居ますように…って。
学校帰りのファミレスに、私たち4人がいた。

今日はテストで部活もないのでテストよりみんなで過ごす方を選んだ。

「でもさ、なんか新鮮だねえ。学校以外でこうしてるの。」

亜花莉がしみじみ言う。

「確かに…4人でっていうのはあんまり…」

私も呟く。

「っていうかさ、問題は今はテスト期間だって事じゃない？約一名
また赤点取りそうな奴がいるし…」

田辺くんはそう言いながらキミを見た。

「うるせえなつ。この前のは解答欄1つづつずれてて、気がついた
ら終わる5分前だったんだよつ。」

キミは必死に反論する。顔がマジだ…。

「はいはい。でも、そうじゃないのも赤点ギリギリじゃなかったか
なあ…。そんなんでドコの大学に進学するんですかい？良平さま。」
からかう口調の田辺くん。

…えっ?!…進学？

「あ…あのさつ、良平くん、大学に進学するの?」

私は慌てて尋ねる。…初めて知ったよ…。

「うん…あれっ?優梨に言ってなかったっけ?」

「うん…初耳…っていつか良平君と進路の話ってしたこと無い気がする…。良平君って、将来は何するの?」

「えっ…俺は…」

なぜか口ごもるキミ。…言えないような事なの…？

「有沢、コイツン家、何してるか知ってる？」

田辺君が私に聞いた。…知らない…。

「…ごめん…知らない…。何してるの？」

「コイツン家、医者。良平のお父さんは小児科・内科の診療所や
てるの。…知らない？『前野医院』って。」

「…医者っ？！だって、良平君、そんな事一言も…。」

…知らなかった…。

そういえば、キミは私を家まで送ってくれるけど、私はキミの家に
行ったこと無かった…。

「だって前野のお姉さんって、確か看護師でしょ。お母さんは薬剤
師だし。」

「えっ…じゃあ、良平君も将来はお医者さん？」

「なっ…なれないよ。普通に考えろよ…。俺、こん中で一番頭悪い
ぞ。」

「…じゃあ…何になるの？」

「…決めてないんだ…。やりたいことを見つけるために大学行くの
もアリかなって…家居たって…家業継げってうるさいし…ならでき
るだけ長く学生で居たいなって…。」

「…そうなんだ。」

知らなかった。キミの家のこと、キミの進路の事、キミの思ってる
事…

「あ、亜花莉は将来、何したいの？」

田辺君が聞く。

「私はデザイナー。いつか自分のブランド作るんだっ。」

亜花莉がいつになく力を込めて言った。

亜花莉の夢は前から知ってた。だから将来は専門学校に行くみたい
…。

「真章は何だっけ？」

キミが聞いた。

「俺？公務員。」

ニヤニヤしながら田辺君は言う。

「公務員って…いろいろあるだろ。何の公務員だよ？」

「俺さ、警察官になりたいんだ。」

誇らしげな田辺君。

「警察官？すごいじゃん！…でもちよつとイメージが…」

「あ、ひつでえな。有沢。お前、逮捕するぞ。」

みんな笑う。…デザイナーと警察官のカップル…なんか面白いな。

「んで？優梨は？」

キミは私に聞いた。

「…私は…みんな笑わない…？」

とりあえず確認。

「笑わないよ。言えよ。」

キミがせかす。

「私ね…保育士になりたいんだ…。」

私は思いきって言った。…ずっと前からなりたいて思っていた事だ。

「保育士かあ…知らなかった。だって優梨、今までそんな事一度も

聞いたこと無かったもんね。」

亜花莉が驚いたように言った。

「…意外？…私、なれるかな…。」

「なれるよ。有沢、ピッタリじゃん。」

田辺君も笑顔で言った。

私はキミの方を見た。

「うん。優梨、ピッタリだよ。笑われるような夢じゃないよ。頑張

れよ。」

「うん。ありがとう。」

私は微笑む。この4人で居ると、自然に笑える。安らげる。不思議

だな。

…でも、キミといるときは…もっと…。

「それじゃ、俺ら、帰るわ。」

田辺君と亜花莉が立ち上がる。

「私たちもでよつか？」

私がキミに聞く。

「そうだな…帰るか。」

私たちは支払いを済ませて外に出た。

外の風はやつぱり冷たい。私は寒くなって首に巻いたマフラーに顔を埋めた。

「それじゃ、またな。」

「またあした。」

私たちは別れた。田辺君と亜花莉、キミと私に…。

「それにしてもさ、」

キミが私に話しかけた。

「みんなそれぞれ将来の夢って決まってるんだな。…俺って結構曖昧なんだな…。」

「どうして？そんな事ないよ。」

「だって俺、心の底で、『本当は医者になりたいかも』って思ってる。」

キミは私と目を合わせず、遠い空を見ている。

「なんで？なれば良いじゃん。なれるよ。良平君なら。」

「優梨、今からじゃもう間に合わないよ。本気で医者を目指すならもっと前からたくさん勉強してなきゃ。」

「…良平君さ…最初からあきらめてるじゃん。」

「えっ…？」

私は自分でも驚くような少し強めの口調で話した。

「綺麗ごとかもしれないけど、やるだけやってみれば良いじゃん。」

することが出来たのにしなかったら、後から後悔するよ。私はそんな良平君、見たくない。」

…きまらずい沈黙…。

ちよつと言い過ぎかな…。

でも、これが私の気持ち。医者を目指すのもあきらめるのもキミだ

けど…。

私が頭でイロイロと考えていると、キミが突然口を開いた。

「俺、医者を目指しても…良いと思う？」

「えっ…。」

「俺さ、やっぱり将来は医者になりたい！優梨は今からでも間に合うと思うか？」

「モチロン。良平君、この前の試合の時に頑張って、ちゃんとレギュラーになれたじゃん。」

キミはこの前の試合で、足りなくなったメンバーの代役として試合に出た。

その時に一人で5点を決める大活躍で正式なレギュラーになった。

「…こう思えるの、優梨のおかげだよ。…今まで、嫌なことは避けてたんだよね。それでも何とかなったから。でも、自分の人生までそうなりたくは無いな。」

キミは真剣な顔で話す。…いつものキミだよ。…私の大好きな…キミ。

「だからさ、もし俺がまたあきらめそうになって弱音吐いてたら、また優梨が俺を叱ってくれないか？…情けないけど…」

「叱ってだなんて…。私は自分の気持ちを言っただけだよ。…でも、分かった。なら、一緒に頑張ればいいことだよ。」

「えっ…？」

「私ね、大学入りたいの。保育士っていうより、幼稚園の先生になりたいから。そのためには短大より大学がいいかなって。」

「…じゃあ、夢は違うけど目の前の目標は一緒…って事か？」

「うん。だから、私は良平君が頑張る姿をみて頑張る。」

「俺も優梨が頑張る姿みて頑張るよ。」

「うん。」

私たちは笑いあった。そして手をつないで私の家を目指した。未来の事なんて想像もつかないけど…頑張った人には絶対結果が返って来るって信じてる。

前野良平…一緒に頑張るって決めたキミの名前。
私に頑張りたいって思わせてくれる、キミの名前。

キミとわたしの未来（後書き）

今回は高校生っぽく、将来について書いてみました。（当初は良平が医者になるなんて考えてもなかったですが（笑））みんなそれぞれ個性的な夢を持っています。どうなっていくかは私も考えてませんが…。

それでは今回はこの辺で。また次回、お会いしましょう！

キミとにくまん

キミが私に話した夢は、お医者さんになること。

大丈夫。キミならきつとなれるから。みんなはムリって言ったって、私だけは応援してるからね。

「優梨いゝ！！分かんないよぉ。」

泣きべそをかきながら、向かい側に座るキミは机に突っ伏した。

「はいはい、どこが分からないの？」

クスクス笑いながら私はキミに問いかける。

今、私たちは勉強していた。明日は期末テストの最終日だ。

医者になると決めたキミは前半にある教科を（数学以外は）捨てて、後半の教科に的を絞り昨日から図書室で私と勉強していた。

「あ、だからここは問題文のここを読んでみるんだよ。」

「あ…ああ！そっかぁ！ありがと、優梨！」

キミの声が少し大きかったのか、勉強中の生徒が一斉にこっちを向いた気がしたので、私は慌てて口の前に指を立て『しいゝ！』と言った。

さすがにみんな、明日が最終日ということもあって、空気がピリピリしている。

医者になるためにはどのくらいの教科を勉強しないといけないか、私とキミは昨日の放課後に本屋へ調べに行った。

…思っていた以上に大変そうだった。

キミは数学以外は全部とっていいほど苦手なんだよね…。

キミの昨日の青ざめた顔が浮かんでき…でも、入試までは1年くらいあるし…。

だから、キミと一緒に私も勉強するよ。

分からないところは答えられる範囲で教えるよ。私、応援してるか

らね。

チラッと向かい側のキミを見ると、必死に考えていた。…解答欄は白かったけど…。

そうしていると、図書の先生がみんなに向かって言った。

「そろそろ下校時間なので図書室も閉めますよ。」

チラッと時計を見た…もうこんな時間…外は藍色になっている。

「良平君、そろそろ帰ろう。図書室閉まるみたいだし。」

「…うん。そおだな。あー、疲れたあ！」

クスクス笑う私。私たちは勉強道具をカバンに詰めて図書室を出た。外との温度差に身震いしながらも、下足場を出て、私たちは帰りはじめた。

今日は一段と寒い。マフラーと手袋をしていても、すきま風が冷たかった。

「寒いなあ…なあ、コンビニ行かない？」

「賛成！暖まりに行こう！」

私たちは帰り道にあるコンビニに立ち寄った。

曇っているガラスの自動ドアが温度差を表している。

「あ…。」

キミは何か思い出したようにつぶやいた。

「どうしたの？」

「いや、ちよつと。オレ、買うもんあったんだ。優梨、ちよつと待ってて。」

そう言ってキミは、なぜかレジに向かって歩き出した。…ま、いつか。

私は立ち読みしていた。すると、意外と早くキミが来た。

「アレ？もういいの？」

「うん。あ、優梨は何か買うもんとか無いの？」

「うん…。無いよ。…出る？」

「うん。出よう。」

私たちはコンビニを出た。もう少し居たかったけど早く家にも帰り

たかった。

店から出たとたん…あることに気づいた。

「あつ…雪！」

今年の初雪だった。ふわふわした雪がいくつも降りてくる。

「ホントだなあ…だからこんなに寒かったんだなあ…」

「良平君、今日は送ってくれなくても大丈夫だよ。家はすぐそこだし…雪まで降っちゃってるよ。」

「平気だって。」

キミは何でもないと言つかのように平然としている。

「ダメ。良平君は良くても私が心配なの。」

キミの制服の裾を引っ張って私は真剣に言う。

「…分かったよ。んじゃさ…」

キミはそう言つて、コンビニのビニールから、なにか手のひら程の包みを取り出した。

「これ、やるよ。寒いし。」

受け取つてみると、暖かくていいにおい…。これって…

「…肉まんだ！」

私はつい叫んでしまった。

「優梨、肉まん好き？」

「大好きなの！」

「良かった…嫌いだったら2つ共食べてたけどな。」

笑いながら言うキミ。

そっか…レジに行ったのは、レジの横の肉まんを買ったためだったんだね。

「ありがとう。」

私は心からお礼を言った。

「ま、優梨には勉強教えてもらってるし、ほんの気持ちですが。」

おどけてみせるキミ。

「いつも肉まんくれるならいつでもやっちゃおうかな。」

冗談っぽく言ってみる私。

「えっ…肉まんだけで勉強教えてくれんの？随分安上がりな先生ですこと。」

「あー。言ったな。もう教えてあげないっ。」

「ごめんごめん！優梨先生いないとムリ！許してよ。」

私はふと気づいた。

「良平君、今、優梨先生って言った？」

「えっ…？うん。」

「わあ、本当？私、優梨先生ってよばれるのが夢なの！なんか嬉しい！」

しかも、それを言ったのが…キミだったし。

「おいおい、言ったのがオレで良かったのか？ホントは子供だろ。」

「いいの。先生は先生なんだし、良平君は十分子供だよ。」

「…優梨…最近真章や北里に…似てきた気がする…。」

「ま、いいじゃん。じゃあ、私はそろそろ帰ります。」

「おう。気をつけるよ。知らない人についていくなよ。」

「…良平君。」

「ははは。さっきのお返し。それじゃあな。」

「うん、また明日。」

私たちはそれぞれ反対方向へ歩き出した。

付き合いはじめてから、初めて一人でかえるかもしれない。ちょっと変なかんじ。

でも、私は抱えている暖かな包みを思い出した。

まるで、キミがここに居るみたい…あつたかい…。

降り続いている雪に、暖かさすら感じる。

ほら、また、キミのぬくもりが私の中に入ってきたよ。

あつたかいんだ。

やさしいんだ。

ここちいいんだ。

ただの肉まんも、キミがくれただけで、もっと嬉しくなる。

…おかしいかな。

…私だけかな。

…ま、いつか。私だけでも。

キミの役に立てるなら、そばに居られるなら…肉まんがなくなっただけで、勉強教えるよ。一緒に勉強しよう。

帰ったら…真っ先に肉まん食べよう。

冷めてても良い。多分キミのも冷めてるだろうから。

前野良平…ほかほかしてて、あつたかくて、大好きな…私にとって肉まんみたいな…キミの名前。

明日もまた一緒に、肉まん食べたいな…そんなキミの名前。

キミとにくまん（後書き）

いがかでしたか？今回は帰り道編です。タコヤキといい肉まんとい
い：食べ物に縁の深いカップルです（笑）

今回で15話目です。正直自分でもびっくりです。どこまで続くか
分かりませんがこれから頑張って執筆していきます
それではまたお会いしましょう！

キミの家で

舞い降りた雪。

ふわふわの雪。

今年初めての雪。

それはそのまま積もって、町中を真っ白にした。
初雪が降った次の日、テストが終わった。

結果はただけど、キミは結構良かったみたい。

ガラッと私は窓を開ける。はく息は昨日よりも白い。

「うー…寒い…」

私は小さく身震いをしてすぐに窓を閉めた。

今日は休みだ。

何しよう…。もうテストは終わった。勉強する気にはなれない。

その時、携帯が鳴った。キミからの電話だ！

私は急いで電話に出た。

「はいっ！おはよう、良平君？どうしたの？」

私は緊張と喜びが混ざった声で言った。

「おはよう。あのさ、今日、ヒマ？」

「えっ…予定ないけど…どうして？」

「あのさ、今日は先生の予定が入って練習無くなったんだ。それで…」

もったいぶるキミ。

「…それで…？」

「…今日…ウチ来ない…？」

「良いよ。…良平君の家行くのって初めてだし。」

「マジで？じゃあ迎えに行く！何時が良い？」

「うーん…じゃあ9時半に…来てくれる？」

「9時半だな、了解！じゃあ、待ってて」

キミは嬉しそうな声。

「うん、じゃあ、後でね！」

『おう、またな！』

そう言っで電話を切った。

…キミの家に行く…。というより、男の子の家に行く…。私には初めてのことだ。

…でも…何しに行くんだろう…？

ちょうどその時、携帯がまた鳴った。メール音だ。見てみると…キミからだった。

『さっきの追伸。勉強教えて欲しいから、もし良かったら勉強道具持ってきなよ。』

…そうか…勉強…。

そうだよ、テストが終わっても…勉強しなきゃいけなかったね…。確かキミは、先生から

「死ぬほどやらないと無理だ」

って言われてたよね…。

私は急いでカバンに勉強道具を詰め込んだ。

そしてご飯を食べ、着替をして、キミを待った。

…8時27分…。

玄関のチャイムが鳴った。私は出たがるお母さんを押さえ、ドアを開けた。

…キミが立っていた。

「おはよう」

息を弾ませ、頬も耳も赤くしながらキミは言った。

「おはよう」

そんなキミがとても嬉しかった私は笑顔で言った。

「ごめんな…急に…」

「ううん。どうせヒマだったし…こっちこそ迎えに来てくれてありがとう。…上がってく？寒かったでしょ？」

「ううん。オレは大丈夫。…優梨が良ければ…」

「私は良いよ。行こっか」

私はお母さんの視線をムシして外へ出た。

空気が冷たい。

はく息は真っ白。

雪に足を取られる…。

「大丈夫か？コケンなよ」

キミは私の様子を見ながら歩くスピードに合わせて歩く。

「うん…大丈夫…」

私はそう言いながらも必死で歩く。絶対にコケるもんか…！

ところが、たまたま足場の悪い所に足を置いたので体制が崩れた。

「あつ…」

絶対コケた…。

そう思ったら…体が妙に浮いた。

腕を掴む手…。

キミだ。

キミはニヤニヤしながら

「ほうら、やっぱりコケた」

と言って私を持ち上げた。

「…ありがとう…」

すごいな…片腕で私を楽々持ち上げたキミ…私は寒さと恥ずかしさで顔を赤らめながら言った。

私たちは歩き出した。

すると、キミが急に私の手を掴んで自分のジャンパーのポケットに

入れた。そして自分の手を私の手の上に重ねた。

「…道連れ」

「えっ？」

「次に優梨がコケたら一緒にコケてやるよ」

「えっ…でも…」

「でも…？」

「…助けてくれた方が嬉しいかな…」

…少しの沈黙。

「あ、そうか…そうだよな！ごめん…」

キミはポケットから手を取ろうとする。

「待って！…やっぱり…このままでいいよ」

「…そう？」

そう言ってキミは再び手を戻す。

キミの手と私の手が重なりあう。

キミの手も、ポケットも…とってもあったかいよ。

そうやって私たちは、寄り添いながらキミの家に行った。

キミの家に着いた。

大きなウチ…。

「俺んち診療所だつて…知ってるだろ？それは裏側にあるんだ」

そう言って家の向こう側を親指で指すキミ。

「へえ…」

「最近急に冷え込んできたから患者さん、増えてるんだ。不謹慎だけれど…」

「…じゃあ…誰もいないの？」

「うん。みんな診療所…あ、でも、だからって変なことはしないから…」

「…何も言つてないよ…」

私はキミの方を見る。

「あ…そうだな…」

キミは頭を掻きながら家の鍵を開けた。

キミの手と私の手が重なりあう。

キミの手も、ポケットも…とってもあったかいよ。

そうやって私たちは、寄り添いながらキミの家に行った。

「お邪魔しまーす…」

中に入った私は驚いた。

まるで自分のいる世界とは全く違う世界に来てしまったかのようなようだ。

「広いねえ……」

「おい、そんなところでつつ立ってないで、行くぞ！」

キミは照れながら私を手招きする。

「は……はい……」

私は我に返り、キミの後をついて行つた。

螺旋状の階段をのぼり2階上がった。

その間も度々高そうな絵や置物を見掛けた。

でも、すべて品のいい物ばかりで高そうに見えても、決して派手ではなかった。

そうしている間に、キミはある部屋の前で止まった。私も止まった。

「ココ」

キミは部屋を指差し、ドアを開けた。

キミの部屋は広くて掃除もきちんとしていた。

私の部屋より2畳分位広いんじゃないかな……。

「部屋、大きいね」

「……まあな……あ、俺、お茶持ってくるよ！適当にくつろいでて」
そう言つてキミは下へ降りていった。

くつろいでてつて言われても……なぜか落ち着かない……。

私はそわそわしながらベットの端に腰かけた。

その時、ドアの向こうで言い合う声が聞こえた。

不思議に思つて様子を見てみると、ドアが勢いよく開いて女の人が入ってきた。

「あー、やっぱり！かーわいいっ」そう言つて女の方はこつちに入ってきた。

私がキョトンとしていると後ろからキミが大声で言った。

「おい、アネキ！入ってくんなよ！」

……えっ……？！

「お……お姉さんなんですかっ?!」

私は突然の出来事に驚く。

「そつ。優梨ちゃんよね？いつも良平がお世話になってます。姉の良美です」

ぺこつと頭を下げ、無邪気に笑った良美さん。笑った顔は、確かにキミとそっくりだ。

「優梨、ごめんな…急にアネキが出てきて…驚いただろ…」

「なによ、その言い方。休憩時間だから家に帰ってきてみたなら誰か来てるみたいだから挨拶しただけよ」

最後にお姉さんは

「ねー」

とこつちを向いて言った。

私は少し笑ってから

「はじめまして、有沢優梨です。以前、遊園地のチケットありがとうございました。」

「あ、良いの良いの。後で聞いたら良平が時刻表間違えて持ってたからなんでしょ？気にしないで。こつちこそごめんねー」

そう言ってお姉さんはキミの頭をポンポンと軽く叩いた。

キミは恥ずかしそうに手をはらって、

「もう良いだろ。俺たち勉強するんだからよ」

その言葉にお姉さんは反応した。

「…あんたさ…どうして急に勉強し始めたの？」

「どーでも良いだろ」

お姉さんは何か言いたそうだったが、私がいるせいかなそれ以上は何も言わず、ちよつと笑って、

「そうね。ま、学生の仕事は勉強だからね。私はもう行くわ。じゃあね、優梨ちゃん」

「はい、さようなら…」

そうしてお姉さんは去っていった。

…ドアの向こうの廊下から、お姉さんの足音がかすかに聞こえた。

「…言ってるの？お医者さんになりたいって…」

「…言ってるない。バカにされそうだし…」

「…違うと思うけどな…」 「良いんだ。今は勉強して、皆を見返してやるんだから。…あ、優梨は迷惑かな…」

「迷惑だなんて…思っただけだよ。ただ、家族に協力してもらったのも一つの方法じゃないかなって思っただけ」

「そうだな…ま、それは来年にとっておくよ」

キミは笑った。

私も笑った。

「じゃ、勉強しようか」

私はカバンから教科書を取り出しながら言った。

キミもベットの側のテーブルに勉強机から教科書を取り出して座った。

どのくらい時間が経ったただろう。

部屋にはシャーペンを動かす音。

時々キミが

「これってどうやるの？」

と言って私が答えるが、それもすぐに止み、また元の静けさが戻る。

ふとキミを見た。

真剣な顔。

私の視線に気付いたのか、キミもこっちを見る。

「なんだよ」

笑って言うキミ。

「別に」

笑ってまたノートに視線を戻す私。

こんなやりとりが嬉しくなる。

これから先、どんなことがあっても、キミとこうしていたい。

こうしていてね。

前野良平。キミの名前。ずっとずっと一緒にいるよ。キミも私の側にいてほしい。そんなキミの名前。

キミの家で（後書き）

いかがでしたか？今回はある方からのアイディアで優梨が良平の家に行きました。ずっと出したかった良平の姉・良美も出せて個人的には満足しています。

さて、突然ですが次回で最終回になります。一番はじめに書いた小説だけに、思い入れが強い作品なので今まで以上に力を入れて執筆します。

それでは、最終話でお会いしましょう！

キミの事、ねえ、好きだよ。

あれから、10年が経った。

私たちはそれぞれの目標に向かって進みだした。

途中いろいろあっても、あなたが居たから乗り越えられた。

そう、実感できた。

あなたたちが居たから、毎日が鮮やかだった。

ありがとう…。

コツコツコツ…

少しヒールの高い靴をはき、右手にバックを持ち、左手に娘の手を握りながら私たちはある場所へ向かっていた。

「ママ、今日も行くの？」

「そうよ。…真莉^{まり}はキライ？」

「ううん。好き！」

満面の笑顔の真莉。

私も笑顔になる。

私たちが向かったのは、ビルの前。

入り口の自動ドアが開く。

そこを左に曲がってドアを開けるとスグに受付だ。

「こんにちは」

笑顔の受付嬢。

「予約していた田辺ですが」

「はい、それでは託児ルームにどうぞ」

「はい、どうも」

私は笑顔で言った。

「おはようございます、おはようございます」託児ルームの方から声がする。そこには3人の保育士がいた。

その内の一人の前に立ち、私は話しかけた。

「おはよう、優梨先生」

すると、呼ばれた保育士は笑顔で言った。

「おはようございます、田辺亜花莉さん」

すると二人ともお互いを見て笑いあった。

あれから私は専門学校へ行き、ファッションの勉強をして、小さな店を立ち上げた。

そして、真章と24の時に結婚し、娘を産んだ。ちなみに真章は予告どおり警察官になり、今は警視庁につとめている。

なかなか家に居ないけど、時間がある時は家族を第一に考えてくれる。

優梨は高校を出てから大学へ行き、幼稚園の先生の資格を取った。

そこで2年ぐらいつとめた。

前野はなんと、大学の医学部に現役合格！…信じられないけれどその後で見事に医師免許を取り、実家の前野医院を継いだ。

前野は医院を継いだとき、一つの夢があった。それは…託児所のような機能を持った施設を病院を持ち、優梨と二人で運営して行くことだった。

そのため、優梨は幼稚園を辞め、前野の手伝いをしながら夢を実現させた。

3階建てのビルを作り、その1階は託児所。2階は病院。3階は前野一家が住む場所をそれぞれ作った。

託児所は基本的に予約制。1日単位で子供をあずかる。それ以外に

も、急な用で子供をあずかって欲しい時は時間内ならいつでもあずかってくれる。また、前野医院へ親が行くときに子供をあずかり、子供を遊ばせるためにプレイルームという遊び道具がたくさんある場所を開放したりもしている。私は娘の真莉をよく連れていく。真莉は楽しそうだ。なので幼稚園が休みの日などはよく連れていく。「おはよう、真莉ちゃん。今日もまた遊ぼうね」
「うん。遊ぼうね、優梨先生！」
そう言つてにこにこする真莉。
私もつられて笑顔だ。それは娘に向けたものだけでなく、夢を叶えて輝いている友達にも向けていた。

今日は早く仕事が終わる日だったので、午後から私は亜花莉の家に遊びに行くことになった。

二人でお茶を飲みながら話をした。真莉ちゃんは一人で遊んでいた。「それで？来月だったっけ？」

亜花莉が紅茶をすすりながら言う。

「…うん」

私は少し照れながら言う。

「長かったよねえ…あんたら。ここまでくるの…」

「そうかな…振り返ってみたらあつというまだったけど…」

そう言つて、私は左手の薬指を見た。

キラキラ光る銀色のリング。キミからもらった…婚約指輪。

私たちは、来月結婚する。でも…

「実感ないなあ…」

ボソッと独り言。

「何が？結婚すること？」

「うん…なんか戸籍が変わるだけって感覚なんだよね…」
「ついでに名字も変わるけどね」

亜花莉が言う。…まあ、そうだけどさ…。

「そうだけど…亜花莉は結婚して何か変わった？」

「…そうねえ…真章、前より優しくなったかな…」

「そうなんだ…」

「でも逆に些細なことでケンカばかりしてた。価値観が違っ
ていうのかな…とにかく細かい事が気になるの」

「…例えば？」

「エビフライにかけるのは醤油かソースか！」

「…ケンカしてたの？」

「かなり。1週間ぐらい」「そうなんだ…」

「あ、勿論エビフライだけで1週間じゃないわよ。ケンカしはじめ
たら色々言い合っちゃって…」

「それで…？どうやって仲直りしたの？」

「私ね、」

亜花莉は思いだし笑いをするように少し笑った。

「1週間たった辺りから急にむなしくなったの。バカみたい…って
…急に？」

「そうなの。それで、私は仲直りしようと思ってその日の夕食にエ
ビフライ作ったのよ」

「へえ…」

「真章はいつも帰りが遅いからいつもは先に寝てるんだけど、その
日だけは起きて待ってたんだ」

「うんうん」

私は頷く。

「夜の11時ぐらいだったかな…真章が帰ってきたの。で、私が起
きてビックリした。それでなんて言ったと思う？」

「謝った？」

「うーん…惜しいな」

クスクス笑う亜花莉。

「真章は、『意地張ってごめん、仲直りしよう。エビフライ買ってきた』って言ったの」

「ええっ！ホントに？」

「それがホントなのよ。それでその後に二人でエビフライ食べたの。ちなみにタルタルソースつけてね」

亜花莉は笑った。私も笑った。意外だな…でも良いなあ…そういうの。

「夫婦ってそんなもんよ。ケンカしてもちゃんと仲直りできる」

「…そうだね。恋人なら出来ないかもね」

「そうよ。一度結婚すると、しょっちゅう別れられないじゃない？だから頭冷やす時間がちゃんと取れるの。仲直りもしやすいし、ケンカした後は相手の事が前よりも分かりあえたって思えるんだ」

目をキラキラさせながら言う亜花莉。

私も、こんな夫婦になりたいな。

…なれるよね？

亜花莉の家から帰ったのは夕方。帰りに夕飯の買い物もした。

ガチャッ

ドアを開ける。

「あ、おかえり」

奥の方から声がした。キミの方が早かったんだ…。

「ただいま。今からご飯作るね」

「おう！腹減ったー！夕飯は何？」

「エビフライだよ」

そう言って私はクスッと笑う。

キョトンとするキミ。

「…なんか面白い事があったのか？」

「うん、あのね…」

そうして私は夕飯を作りながら亜花莉たちのケンカの話をした。
キミも私を手伝いながら笑っていた。

そうしてその日の夕飯はエビフライ。勿論タルタルソースで食べた。

夕飯の片付けを済ませて私はソファへ座り込んだ。

キミはお風呂。…つまり、今は私一人。

私はふとベランダへ出た。

夜風が心地良い。

ぐーと腕を上のにのばした。今日も無事に終了。

「おーい、風呂上がったよ」

その時、キミが後ろから声をかけた。

「はい」

返事をするものの、なんだかこの場から動きたく無かった。

「どーしたの？」

キミがベランダにやってきた。

「なんかね、ココが気持ちいいんだ」

「ほお…」

キミは私の横にやってきた。

…しばらく私たちは何も話さなかった。

車の走る音がする。

遠くで子供泣く声がする。

星がきれい。

「ねえ…」

キミに話しかける。

「ん？」

「ここまでするの、長かった？」

「どーしたの？急に」

「いや…今日亜花莉に聞かれてね…私はあつという間って言ったけど」

「俺もだなー。受験勉強してる時とビルに開業する時は長かったけ

どな」

苦笑いするキミ。

「でもさー、私たちが出会ったのって10年前だよ？覚えてる？高校時代」

「覚えてるよ。全部」

急に真顔になるキミ。

「私は…どうかなあー」

「えっ…忘れたの？ひでえ…」

「ウソウソ！覚えてるよ。」

「なら言ってみるよ」

「えっと、穴のあいた傘貸してくれたでしょー、レギュラー落ちて校舎裏で泣いてたし、あと遊園地に行く時バスの時間を間違えて結局行かなかった。あとは…」

「あー、もー言うな！そんな事ばかりかよ！」

キミは顔を赤らめて言う。

「嘘だよ。他のも覚えてる。」

クスツと笑い、私はキミの目を見た。

「私、良平君に会えて良かったよ」

「俺も」

そう言ってキミは私の肩に手をまわす。

「優梨に会えて良かった。優梨が居てくれて良かった。優梨が居るから俺、ここまでこれたんだ」

キミは私の耳元で優しく、囁くようにゆっくり言った。

「好きだよ、優梨」

好き…その言葉はこの世の中で一番あたたかく、やわらかいものにした。思えた。

「私も、好きだよ」

目を閉じ、キミに少し寄りかかりながら言った。

大スキ。

キミが居てくれて良かった。

これからも、ずっと私の隣で居てね。

「はっ…はつくしゅん！」

唐突なくしゃみ。

キミだ。

「もう…結構良い感じだったんだけどな…」

私はそう言っただけで少しくれつら。

「ゴメンゴメン…なんか湯冷めしたみたい…くしゅん！」

「あー、もう分かったから！早く中に入って！医者が風邪なんかひいたらシャレにならないよ！」

「はい。…あ、優梨も早く風呂に入れよな」

そう言っただけでキミはまたくしゃみを一つして中に入ってしまった。

私はふう…と軽くため息をついた。

でも、急に嬉しくなった。

好きだよ。キミの事。

ずっと変わらないでいてね。

キミの事、ねえ、好きだよ。

キミの事、ねえ、好きだよ。（後書き）

いかがでしたか？最終回ということで、その後のみんなを書きました。

この作品は、初めてこのサイトで書いたもので、とても思い出深いです。笑顔の場面を沢山盛り込む事と自分もこんな恋愛したいな…と思える小説執筆を自己目標に書いてきました。ちなみに、この小説は完結が17話と中途半端なので、いずれ続編を書くかもしれません（笑）

ここまでお付き合い下さった読者さまに、心から感謝申し上げます。次はまた別の作品（もしくは続編？）でお会いしましょう！本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1011a/>

ねえ、すきだよ。

2010年10月11日23時59分発行